

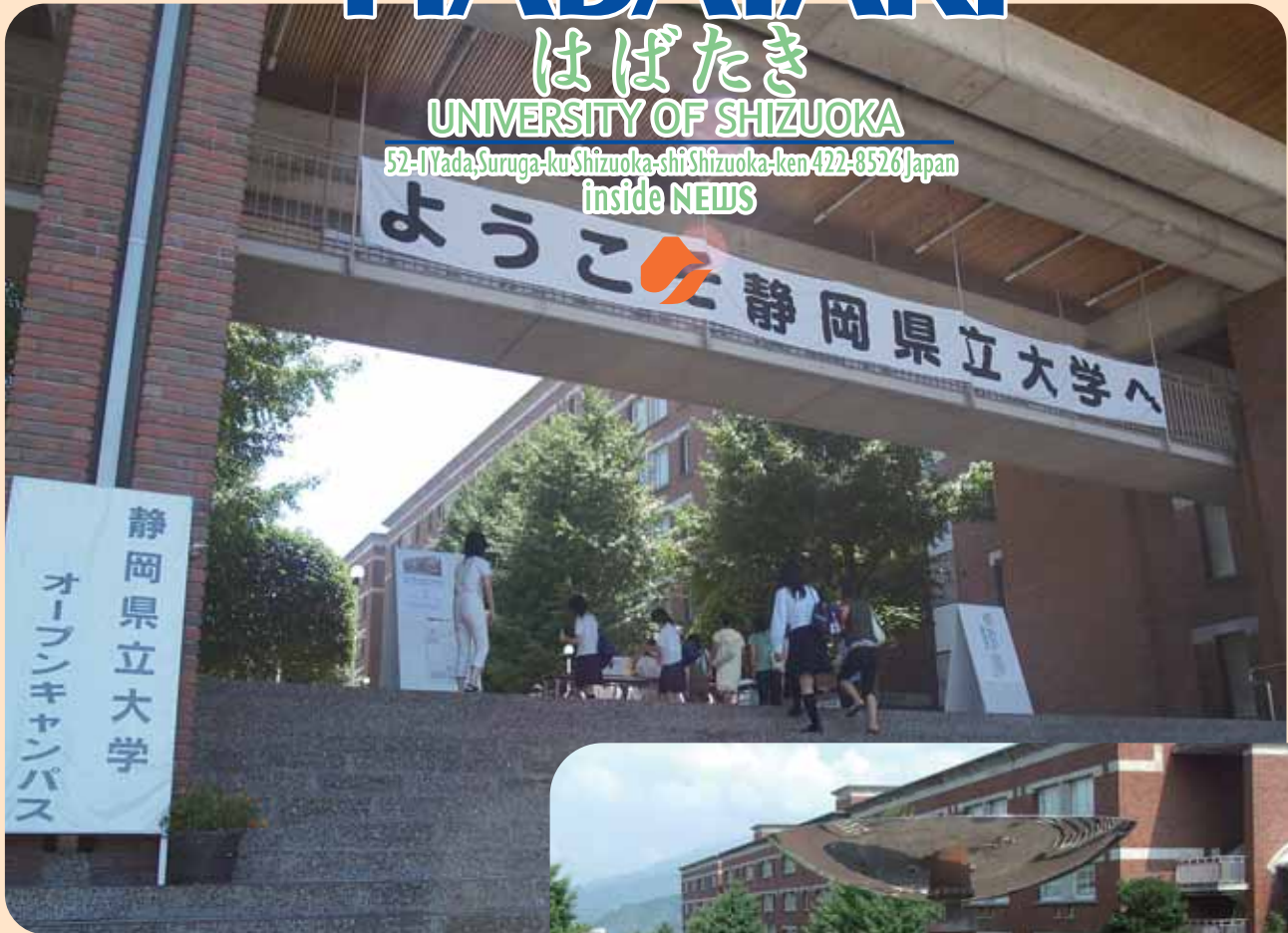
HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS



● CONTENTS ●

オープンキャンパス	1	研究助成採択	24
県民の日イベント	2	受賞	25
2007 US フォーラム	3	星杯テニス大会開催	26
グローバルCOEプログラム		U-japan大賞受賞	27
NZ研究者が来訪	6	薬学教育・研究センター開設	27
ジョイントカンファレンス開催、COE合宿	7	食育イベント	28
SHEP	9	サイエンスフェスティバル	28
名誉教授、教員人事、はばたき基金寄付	13	活躍する修了生	29
奨学金授与	14	図書館だより	31
国際交流		夏休みの行事	33
リール政治学院留学体験記	17	オープンレクチュア	34
ニューカッスル大学夏期語学研修	19	「&YOU」発行	34
オハイオ州立大学インターンシップ	20	FD講演会	35
カリフォルニア州高校生のための日本語研修プログラム	21	教員の著書紹介	35

オープンキャンパス開催

— 自分の未来は、自分で切り拓く —

オープンキャンパス開催



大講堂での全体説明



国際関係学部 座談会

8月7日(休)、8日(金)、11日(月)、12日(火)の4日間、オープンキャンパスを開催し、高校生や保護者の方など約3,800人の参加者で賑わいました。暑い夏の日々、教職員・在学生と参加者との熱い熱い交流が、学内のあちこちで繰り広げられました。

学部紹介、入試説明、学生生活の紹介、在学生との懇談会、キャンパスツアー、模擬講義など、県立大学ってどんなところ？どんなことを勉強するの？大学生活ってどんな感じなの？という参加者の興味に答えながら、大学の雰囲気を存分に味わってもらえるよう、各学部が趣向を凝らしたプログラムを実施しました。

参加者からは、「実験室に入れてもらおう事ができて興味をそ

られた」「設備が

とてもきれいで憧れの気持ちがふくらんだ」「講義がとてもおもしろくて県大で勉強したいという気持ちが強くなった」「初めてのオープンキャンパス参加だったが充実した時間を過ごす事ができた」「学食がおいしかった」などの感想が寄せられ、進路を考えるうえでより具体的な動機付けができたのではないのでしょうか。

大盛況に終わった今回のオープンキャンパスですが、事務局としてはしっかりと事後検証を行い、来年度はさらにレベルの高い内容を参加者に提供したいと考えています。



経営情報学部 個別相談



看護学部 血圧測定



薬学部 キャンパスツアー



食品栄養科学部 研究室訪問

県民の日イベント

私たちのふるさと静岡県が現在のような形でスタートしたのは、1876年8月21日。そこで、「いま」の静岡県はもちろん、「過去」の歴史にふれたり、「未来」の姿を考えたり、静岡県を身近に感じる機会になればと、8月21日(休)を中心に県内各地で色々なイベントが開催されました。本学では、大学構内見学会の「キャンパスツアー」と「環境科学研究所一般公開」、「健康支援センター健康度測定」が行われ、短期大学部では、「地域防災懇話会」と「健康度測定フェア」が行われました。

県大をもっと身近に!! 「キャンパスツアー」開催

キャンパスツアーは、県民の方々に対して、学内を見学していただき、県大に親しみを持ってもらうことを目的に開催しています。

本年は、8月21日(休)に開催し、小学生から会社員の方まで96名の多数の参加をいただきました。参加者は4グループに分かれて、各学部棟や図書館を回り、教職員による説明を受けました。

参加者からは、「先生の説明、笑顔がとても良かった」「説明に熱意が感じられた」「県立大の魅力が強くなった」「(保護者の方から)子供だけでなく、私自身も通いたくなった」などの声が聞かれました。



図書館AVライブラリー見学



薬学部ポスター展示



看護実習室見学

「環境」にふれるチャンス! 環境科学研究所を一般公開しました

環境科学研究所では、県民の皆様には研究所を身近に感じ、どのようなことを研究しているのかを理解していただくとともに、環境学習などを通じて地域に貢献するため、毎年、「県民の日」の事業として「環境科学研究所一般公開」を行っています。

今年は、8月23日(土)に開催し、当研究所の全13研究室において、それぞれの研究内容の展示やデモンストレーション実験、スタンプラリーなどを行いました。

当日は、悪天候にもかかわらず、高校生や親子連れなど約130名の参加がありました。参加者の中には、日頃から環境問題に興味のある方がおられ、研究室の中に入って教員や大学院生の説明を聞き、日頃感じている疑問などを尋ね、活発な質疑応答が繰り広げられました。また、小学生の皆さんには、大学院生のアドバイスのもと、自分の手で実験を行うなど、環境問題を実感しながら楽しく学んでいただき、全ての参加者が有意義な一日を過ごされたものと思います。

この研究所一般公開を通して、参加した方々が地球環境問題のみならず、身近な環境問題にまで、関心を持つきっかけにしていれば幸いです。

健康支援センター

健康支援センターでは、県民の方々を対象に、自分の身体を知り日々の生活習慣を見直すきっかけ作りとして健康度測定(身長・体重・体脂肪率・BMIの他、血圧、骨の健康度や血管年齢)を行いました。各測定後の結果からアドバイスを行い、家庭で簡単にできる運動方法を体験していただきました。



センターの役割について説明

短期大学部

短期大学部では、地域防災懇話会と健康度測定フェアを行い、小鹿町内会住民の方たちに参加していただきました。地域防災懇話会は、「震災時に機能する地域防災を考える」をテーマに話し合い、健康度測定フェアは体成分分析、骨密度測定、健康相談等を行いました。



地域防災懇話会

2007US フォーラム

2007US フォーラムが開催される

2007US フォーラム実行委員会 委員長・副学長 木苗 直秀

2007US (University of Shizuoka) フォーラムは、8月1日(金)と2日(土)の両日、本学看護学部棟4階の13411講義室で開催されました。本フォーラムでは、平成19年度に採択された教員特別研究費及び一般研究費における研究成果について、口答で53件、ポスターで79件が発表されました。また、平成19年度文部科学省に採択されたグローバルCOEプログラムおよびGP (Good Practice)プロジェクトについて、それぞれの活動状況が報告されました。

本フォーラムには、延べ299名の教員、132名の学生とともに学外から57名の参加者があり、熱心に質疑応答がなされました。

聴講者数

(単位：名)

区分 日別	本学教員	本学学生	一般県民等	計
8月1日(金)	185	97	35	317
8月2日(土)	114	35	22	171
計	299	132	57	488

2007 US フォーラム

静岡県立大学研究成果発表会



学長挨拶



ポスター発表



口頭発表

2007USフォーラム <8月1日(金)> 発表プログラム

学長挨拶

GPプロジェクトリーダー報告

短期大学部 准教授 江原勝幸

平成19年度 教員特別研究費・一般研究費採択研究課題 口頭発表

No.	学部	代表者職・氏名	テ ー マ
1	薬学	教授 赤井 周司	加水分解酵素と遷移金属化合物による協同触媒的不斉合成法の開発
2	薬学	教授 佐藤 雅之	ムスコビリジンの効率的全合成
3	薬学	教授 菅谷 純子	高カロリー食の摂取により脂肪肝を形成したラット肝臓のグルクロン酸抱合酵素UGT1A1、UGT1A6の発現亢進は核内受容体CAR、PPAR α の活性化に起因する
4	薬学	教授 星野 稔	高脂肪食摂取に伴うインスリン分泌の変化に対する緑茶カテキンとカフェインの同時摂取による効果
5	薬学	教授 藤井 敏	蛋白質結晶解析結果からの揺らぎ構造情報の抽出と解析
6	食品	教授 小林 裕和	高輝度発光ダイオード（LED）照射による機能性成分強化植物の開発
7	食品	教授 合田 敏尚	メタボリックシンドロームと関連する食事・生活要因の解析と栄養指導介入効果の評価指標の検討
8	食品	教授 渡辺 達夫	安定同位体を用いたトウガラシ辛味成分合成酵素活性測定法の確立と酵素の精製
9	食品	教授 加治 和彦	ヒト脂肪細胞への分化能を有する幹細胞の単離とそれを用いた脂肪細胞分化機構に関する研究
10	食品	教授 横越 英彦	カツオ卵巣特有のDHA含有リン脂質の脳内代謝と脳機能に関する研究
11	環境	教授 坂田 昌弘	汽水域における富栄養化が生態系に与える影響の解明 ―佐鳴湖をモデルとして―
12	環境	教授 岩堀 恵祐	異化的鉄還元反応を活用した重金類類の生物学的吸着除去
13	環境	教授 橋本 伸哉	日本沿岸海域におけるハロカーボンの分布と大気へのフラックスに関する研究
14	環境	准教授 雨谷 敬史	ハロゲン化多環芳香族炭化水素の環境リスク評価に関する研究
15	国際	教授 伊豆見 元	李明博新政権の発足と日本
16	国際	教授 伊豆見 元	東アジアにおける政権交代と国際政治力学の変容
17	国際	教授 六鹿 茂夫	黒海地域をめぐるロシアと欧米の綱引きと協力
18	国際	教授 小黒 啓一	静岡県経済・企業の構造変化と国際競争力 ―グローバル経済下の競争優位―
19	国際	教授 富沢 寿勇	世界のハラル産業の動向と日本の現状
20	国際	准教授 津富 宏	就労に困難を抱える、個別的・継続的・包括的若者自立支援システム作りに向けての研究
21	国際	教授 立田 洋司	ムセイオン・キャンパスづくり ―隣接文化機関の連携による立体的新教養教育システムの構築
22	国際	教授 前坂 俊之	「岡村昭彦文書の利活用に関する学部際的研究と実践」の活動報告
23	経情	准教授 湯瀬 裕昭	安否情報システムの改良と遠隔運用に関する研究
24	経情	准教授 渡邊 貴之	災害時におけるデータ保護のための遠隔データミラリングシステムに関する研究
25	看護	教授 古川 文子	下肢形態適合型最適圧分散マットの開発と評価―基礎的研究―
26	短大	教授 古賀 震	健診で明らかとなった外国人労働者のメタボリック症候群の現状と予防対策
27	短大	講師 千鶴かおる	知的障害者施設職員における歯磨き介助負担感の要因分析
28	短大	教授 漁田 俊子	エピソード記憶における聴覚情報の環境的文脈依存効果

平成19年度 教員特別研究費・一般研究費採択研究課題 ポスター発表

No.	学部	代表者職・氏名	テ ー マ
1	国際	教授 小浜 裕久	転機に立つグローバリゼーション
2	国際	講師 伊藤 一頼	国際法学における開発問題の再定位―脱植民地化過程における自決権の機能に着目して―
3	国際	准教授 剣持 久木	仏独共通教科書使用現場調査の中間報告
4	国際	教授 小久保康之	E.U拡大とリスボン条約：新しい拡大ヨーロッパの国際秩序構築に向けて
5	国際	教授 小幡 壮	東南アジア地域における民族・宗教・人権問題等を焦点とする研究
6	国際	准教授 湖中 真哉	アジア・アフリカの地域セーフティ・ネット分析に基づく在来型難民支援モデルの予備的研究
7	国際	准教授 水野かほる	外国人児童生徒に対する日本語教育支援学生ボランティアの持つ意味
8	国際	准教授 藤巻 光浩	博物館における先住民文化展示を通して「人権レジーム」確立の可能性について ―米国立インディアン博物館の場合―
9	国際	准教授 澤田 敬人	政治的無意識によるイメージの生産、グローバルな視差（parallax）、ポスト帝国の地域研究再編
10	経情	教授 池田 哲夫	次世代キャンパスシステムに関する基礎的研究
11	経情	准教授 藤澤 由和	ソーシャル・キャピタルを基盤とした新たな医療・福祉政策の展開とその可能性
12	経情	教授 齊藤 和巳	ランク学習によるバイオマーカー代替指標の構築
13	経情	教授 池田 哲夫	地理情報システム（GIS）を用いた地域分析の研究
14	経情	准教授 湯瀬 裕昭	パーソナル型遠隔講義システムの研究
15	経情	講師 森 勇治	経営情報学部における簿記会計教育の効率化の取り組み
16	経情	助教 岸 昭雄	交通施設整備が都心商業の空洞化と再生に与える影響とその構成分析
17	経情	教授 芹沢 幹雄	高齢社会における生きがいとしてのスポーツ活動に関する研究2
18	看護	助教 濱井 妙子	静岡県A市周辺地域に在住しているブラジル人の健康に対する認識に受診行動が及ぼす影響
19	看護	講師 日吉 孝子	アスベスト肺モデルマウスに対する肺線維化に関する組織学的検討
20	看護	助教 山田 貴代	地域における外国人の医療機関受診状況に関する研究―静岡県A病院における外国人と日本人の医療費の比較―
21	看護	教授 中島登美子	主体的な学習を導く教育方法の開発
22	看護	教授 松田 正己	タイ国立Khon Kaen University(KKU、コンケン)及びSrinakharinwirot University(SWU)（バンコク）の看護教育、臨床教育、看護研究に関する情報交換・情報収集
23	看護	教授 木村 正人	梗塞腎と残存腎におけるRAS系の検討および新規モデルの作成
24	看護	教授 金澤 寛明	簡便で練習効果のあがる基礎看護実習モデルの作成
25	看護	教授 小寺 栄子	看護トップマネージャーの環境認知と現状への取り組み ―看護管理者へのインタビューを通じて―
26	看護	助教 酒井見名子	静岡県における防災教育のあり方に関する研究 ―看護学の視点から考えた防災教育教材の作成―
27	短大	准教授 吉田 直樹	歯周組織由来線維芽細胞によるTissue Inhibitors of Metalloproteinases発現におけるTransforming Growth Factor- β の影響について
28	短大	講師 那須 恵子	竹試料液の抽出方法及び歯垢形成阻害効果に関する実験方法の文献的検討
29	短大	准教授 鈴木 琴江	看護基礎教育終了時における看護実践能力の到達度と学習経験（カリキュラム）との関連
30	短大	講師 長澤 利枝	看護系大学及び短期大学における災害看護教育の実態―科目設定、卒業時到達目標、教育方法について
31	短大	講師 永野ひろ子	看護学生のコミュニケーションスキルトレーニング法の開発に関する研究
32	短大	講師 増田 明美	通信制高等学校に通う生徒への保健支援プログラム開発のための基礎的研究―全国の通信制高等学校における保健室に関する実態調査―
33	短大	講師 中澤 秀一	中小企業および派遣労働の賃金・雇用システム
34	短大	准教授 高林ふみ代	粘性食物繊維溶液摂取の胃粘膜に対する影響
35	短大	准教授 鈴木 温子	高齢者の口腔起因のリスクに関する研究～介護施設における高齢者の口腔起因のヒヤリ、ハット報告と分析～
36	短大	教授 田中丸治宣	受講生が随時利用できる授業DVDの作製、貸出しによる学習支援
37	短大	教授 石野 育子	介護過程におけるアセスメントに関する研究
38	短大	准教授 奥田 都子	高齢者理解と支援能力の育成に関する研究（2） 個人史を起点とする高齢者の生活史の学習による効果の検討を中心として
39	短大	教授 佐々木隆志	高齢者サービスのマンパワー対策と労働市場の多角的分析
40	短大	准教授 三富 道子	イギリスの高齢者介護に関するケア基準法と介護職員の職業能力に関する研究

2007USフォーラム <8月2日(土)> 発表プログラム

グローバルCOE拠点リーダー報告 生活健康科学研究科 教授 木苗直秀

平成19年度 教員特別研究費・一般研究費採択研究課題 口頭発表

No.	学部	代表者職・氏名	テ ー マ
1	薬学	教授 石川 智久	膵β細胞におけるCa ²⁺ アポトーシス機構の解明と創薬ターゲットとしての可能性
2	薬学	教授 伊藤 邦彦	Warfarin反応性の予測マーカーとしての VKORC1、CYP2C9遺伝子多型情報-Warfarin投与量設定への影響の検討
3	薬学	教授 今井 康之	可食性抗体をめざした志賀毒素特異的組換え型 IgA 抗体の発現
4	薬学	教授 奥 直人	ナノキャリア診断薬開発のための技術基盤の構築と創薬への応用
5	薬学	教授 賀川 義之	免疫系への悪影響を回避した脂肪乳剤投与法の開発
6	薬学	教授 菅 敏幸	Serotoninの全合成と天然物がラセミ体として単離された謎の解明
7	薬学	准教授 上村 和秀	Notch受容体のリガンド認識機構および腎障害時における発現
8	薬学	准教授 川島 博人	リンパ球ホーミングの解析に有用な新規コンディショナルノックアウトマウスの樹立
9	薬学	講師 浅井 知浩	RNA創薬に向けた核酸デリバリーシステムの構築
10	食品	教授 大島 寛史	オゾン酸化コレステロールatheronal-A、-Bの生成分子機構の解析とタンパク質付加反応の検討
11	食品	准教授 新井 英一	機能性食品を利用した新たなテララーメイド栄養管理法の構築
12	食品	准教授 河原崎泰昌	“リバース・プロテオミクス”研究領域創成に向けた基盤研究
13	食品	准教授 熊澤 茂則	ベリー系果実に含まれるアントシアニン類の分析と生理活性評価
14	食品	助教 望月 和樹	肥満・糖尿病の発症・進展をモニターする新規バイオマーカーの臨床応用
15	環境	教授 岩堀 恵祐	バイオマグネタイトの高密度集積培養系の構築とその菌叢解析
16	環境	教授 桑原 厚和	消化管に発現している化学受容細胞の組織化学的研究
17	環境	准教授 伊吹 裕子	エドジェネティクス異常を標的とした新規光増感法に関する研究 -ヒストン脱アセチル化阻害剤と光増感剤による効率的細胞死の誘導とそのメカニズム-
18	薬学	教授 鈴木 隆	カテキン誘導体の抗インフルエンザウイルス活性
19	薬学	准教授 武田 厚司	海馬の長期増強 (LTP) に対する亜鉛の領域依存的な調節作用
20	薬学	講師 竹元万壽美	紅茶2次ポリフェノール高含有新規発酵茶飲料の開発
21	薬学	講師 小原 一男	血管平滑筋収縮に対するお茶カテキン類の作用
22	薬学	准教授 齊藤 真也	お茶に含まれるPDE阻害成分研究
23	薬学	講師 石田 均司	ウーロン茶由来の新規抗炎症作用成分Chafuroside A 高含有茶製造法開発、及びその生成機構解明
24	食品	准教授 熊澤 茂則	茶カテキン類とシクロデキストリンとの相互作用の解析
25	食品	助教 丹羽 康夫	被覆栽培による茶葉成分変動の解明

平成19年度 教員特別研究費・一般研究費採択研究課題 ポスター発表

No.	学部	代表者職・氏名	テ ー マ
1	薬学	教授 山田 浩	糖尿病の発症や治療効果の判定に有用な酸化ストレスマーカーの検討
2	薬学	教授 板井 茂	固形製剤の溶出過程における有効表面積の経時変化に関する研究
3	薬学	助教 山崎 泰広	高カロリー食摂取動物における肝コレステロールトランスポーターabcg5/8発現変動の解析
4	薬学	講師 尾上 誠良	ペプチド性粉末吸入製剤に関する薬物動態制御学の研究
5	薬学	助教 伊藤 由彦	糖尿病モデルラットにおける排尿パラメータと膀胱受容体の変動
6	薬学	助教 金子 雪子	膵β細胞インスリン分泌調節におけるジアシルグリセロールキナーゼの機能解析
7	薬学	助教 関 俊哲	糖タンパク質N-結合型及びO-結合型糖鎖の同時高感度分析法の開発
8	薬学	助教 井川 貴詞	ケイ素の高次利用に基づく多置換ビニル化合物の位置選択的合成
9	薬学	准教授 前田 利男	新規に開発したインスリン抵抗性自然発症マウスにおける非アルコール性脂肪肝の発症機構の解析
10	薬学	教授 小野 孝彦	HIGAマウスはToll-like receptor 4を発現し、LPS 投与により凝固系活性化を介して腎炎を増悪する
11	薬学	講師 内田 信也	オピオイド鎮痛薬の臨床効果および副作用に及ぼすμオピオイド受容体遺伝子多型の影響
12	薬学	教授 出川 雅邦	鉛イオン誘発脂質代謝異常に対する脳卒中易発性高血圧自然発症ラットの感受性に関する研究
13	薬学	教授 豊岡 利正	生体試料中の低分子量化合物の分析
14	薬学	教授 山田 静雄	間質性膀胱炎モデルにおける排尿障害と膀胱受容体異常
15	薬学	教授 野口 博司	天然資源由来の高脂血症・動脈硬化治療薬の開発
16	食品	助教 丹羽 康夫	温室メロンの香気成分発現機構の解析
17	食品	教授 大島 寛史	ヤマモ乾燥品(山薬)およびその成分ジオスゲニンによるマウス大腸がんの予防
18	食品	教授 加治 和彦	免疫抑制剤による血管内皮障害機構の解析 -臓器移植技術の改善を目指して-
19	食品	准教授 桑野 稔子	幼児期からの生活習慣病予防に関する食育方法の検討
20	食品	教授 鈴木 裕一	陰イオン交換輸送体DRAsのKOマウスを用いた粘膜バリア機能の解析
21	食品	教授 合田 敏尚	時計遺伝子による小腸消化吸収関連遺伝子の発現調節
22	食品	助教 石井 剛志	質量分析による蛋白質酸化修飾構造の解析を基盤とした酸化ストレス研究
23	食品	助教 井上 広子	妊娠期における行動科学理論に基づく栄養教育の効果一次世代への生活習慣病予防を目指して-
24	食品	准教授 熊澤 茂則	プロポリスおよびハチミツに含まれるポリフェノール成分の分析と抗酸化活性
25	食品	教授 丹治 健一	ホスホニウム塩を用いたπ電子不足系空素複素環ハロゲン体の還元反応の開発
26	食品	教授 熊谷 裕通	メタボリック症候群モデルラットにおける腎病変の解析
27	食品	助教 増田 修一	糖尿病発症時における変異・発がん物質の生成及び遺伝毒性の変動
28	食品	准教授 齊藤 慎一	高タンパク食下における酸化ストレスが動脈硬化に及ぼす影響に関する基礎的研究
29	食品	准教授 新井 英一	内臓脂肪蓄積抑制および熱産生を亢進させる食品成分の機能解析
30	食品	教授 酒井 坦	高度好熱菌の糖質関連酵素遺伝子のクローニングの試み
31	食品	助教 太田 敏郎	虚血誘導管腔崩壊のプロテオミクス解析
32	食品	教授 大島 寛史	アルギニン-糖化最終産物誘導体による一酸化窒素(NO)合成酵素の阻害
33	環境	助教 寺崎 正紀	製紙排水に含まれる環境汚染物質の生体影響ならびに流域水圏の環境リスク評価に関する研究
34	環境	教授 坂口 真人	緑茶抽出物を利用した有機-無機ポリマーハイブリッドの合成 -新規吸着材料の可能性-
35	環境	教授 大橋 典男	鹿児島県のマグニから検出されたリケッチア関連細菌DNAの分子遺伝学的解析
36	環境	教授 下位香代子	ベンツ(a)ピレンにより生成するDNA付加体のLC/MS/MSによる解析
37	環境	准教授 佐野慶一郎	廃棄カニ殻から生産したキトサンの有効利用に関する研究
38	環境	准教授 谷 正和	巴川を対象とした抗菌性薬剤の分析・評価に関する研究
39	環境	准教授 谷 晃	良好な大気環境の維持に寄与する植物のガス交換機能の解明-植物の有機ガス吸収能力の評価-

グローバルCOE プログラム

「グローバルCOEプログラム」研究拠点形成事業 本学にニュージーランド研究者3名が来訪

食品栄養科学部 教授 中山 勉

グローバルCOEプログラム事務局スタッフ



ニュージーランド（NZ）では、機能性（健康増進作用）食品分野の研究が盛んであり、日本との共同研究を希望しています。最近、文部

科学省からこの分野に関連する研究機関、大学等に、日本・NZ協力「機能性食品に関するセミナー開催のための準備会合」（昨年9月18日開催、於外務省）への参加要請があり、本学から生活健康科学研究科の中山勉教授が出席しました。

このことに関連して、このたび、機能性食品分野における共同研究の相手先と組織的協力体制の可能性（研究テーマ、内容、施設設備等）について意見交換するため、代表的な研究者3名とコーディネーター1名が来日されました。

本学には、去る7月2日ニュージーランド大使館一等書記官と共に来訪し、西垣克学長と面談後、午前は、はばたき棟3階第3会議室において、ニュージーランド研究者3名によるセミナーが行われました。

Julian Heyes博士（Science Group Manager, Fresh Whole Foods, Crop & Food Research）は、「ニュージーランドの機能性食品（野菜と穀物）」について、Margot Skinner博士（Science Leader, Functional Foods & Health, Hort Research）は、「ニュージーランドの機能性食品（果物）」について、Paul Moughan博士（Director, Riddet Institute, Massey University,）は、「ニュージーランドの機能性食品（今後の展開）」について講演されました。

「グローバルCOEプログラム」事業推進担当者、教員、大学院学生（前期博士課程、後期博士課程）など合わせて41名が参加しました。

引き続いて、薬学研究科の各研究室を視察しました。

午後は、はばたき棟3階第4会議室において、本学の「グローバルCOEプログラム」事業推進担当者4名によるセミナーが行われました。

大島寛史教授（生活健康科学研究科・食品栄養科学専攻）は、「ヒト評価系のためのバイオマーカー探索と機能性食品成分の安全性評価法の確立」につ

いて、合田敏尚教授（生活健康科学研究科・食品栄養科学専攻）は、「疾病境界域の代謝・健康状態を予測するバイオマーカーとその個別化栄



NZ研究者による講演

養／服薬への応用」について、山田静雄教授（薬学研究科・医療薬学専攻）は、「医薬品と機能性食品の相互作用の解明と薬食データベースの構築」につ



セミナー会場

いて、今井康之教授（薬学研究科・薬学専攻）は、「機能性食品の開発と食品未利用資源の有効利用」について講演しました。

また、ニュージーランド研究者は、生活健康科学研究科の各研究室を視察しました。

終了後、市内のホテルで夕食会を開催しました。ニュージーランド研究者3名、コーディネーター、書記官、拠点リーダーの木苗直秀教授をはじめ教員14名が出席し、懇談のなかで情報交換もあり、今後、活発な交流が期待できる会になりました。

【ニュージーランド研究者の感想】

“研究者の層が厚く、様々な研究をしているので、今後も積極的に交流を続けていきたい”とのことでした。

帰国後、コーディネーターから、お礼のメールをいただきました。そこにはいずれのニュージーランドの研究者も、本学の訪問が訪日プログラムのハイライトであったとコメントしており、本学と数多くの分野で研究協力の可能性があることから、今後のコミュニケーション及び協力関係に関する覚書の取り交しについて、これを機会に是非ご検討いただきたい旨の依頼がありました。

「静岡県立大学グローバルCOEーカリフォルニア大学 バークレー校ジョイントカンファレンス」開催



昨年9月、「グローバルCOEプログラム」研究拠点形成事業の一環として事業推進担当者4名が、薬食同源研究の国際拠点形成に向けてカリフォルニア大学、オハイオ州立大学及びニュージャージー医科歯科大学を訪問し、これらの大学院との連携体制を整備いたしました（はばたき104に掲載）。この下地をもとに去る6月13日～14日に、カリフォルニア大学バークレー校の研究者3名を招聘し、本学とのジョイントカンファレンス（合同会議）を開催しました。これは、大学院生を最先端研究者に触れさせることにより、研究への興味を喚起し、英語でのコミュニケーション能力の向上を図ることを目的としています。



1日目は、学長と面談後、小講堂において同校の研究者3名によるセミナーが行われました。Gian Garriga 教授（遺伝子学・ゲノム学・発達学分野、分子細胞生物学部）は、「線虫の神経発達におけるWntシグナル」について、Qiang Zhou 教授（生化学・分子生物学分野、分子細胞生物学部）は、「7SK：転写や細胞成長、形質転換の調節因子としての核内低分子RNA」について、Robert S. Zucker 教授（ヘレンウィルス神経科学研究所、神経生物学分野、分子細胞生物学部）は、「シナプ

グローバルCOEプログラム事業推進担当者

薬学部長 教授 奥 直人

薬学研究科長 教授 今井康之

生活健康科学研究科長 教授 小林裕和

ス神経伝達の生物物理学的解析：短期可塑性、神経調節、SNAREの相互作用」について講演されました。いずれも最先端の研究内容で、多少理解するのが難しかったと思いますが、大学院生、若手研究者には大いに刺激になったことと思います。

続いて、本学の博士後期課程大学院生4名により、英語による研究発表が行われました。畑中順也君（薬学研究科・医療薬学専攻、1年）は、「可溶性コエンザイムQ10製剤の物理化学的ならびに薬物動態学的特性評価」について、小山直己君（生活健康科学研究科・食品栄養科学専攻、2年）は、「代謝活性酵素CYPを過剰発現したヒト細胞を用いるアクリルアミドの遺伝毒性」について、新免拓弥君（生活健康科学研究科・環境物質科学専攻、1年）は、「UVA照射は9,10-phenanthrenequinoneが誘導するヒストンH2AXのリン酸化を亢進する」について、稲井誠君（薬学研究科・製薬学専攻、3年）は、「ミリオンシンの全合成」について発表しました。一流の研究者との質疑応答はよい経験になったことと思います。鈴木雅近理事長、西垣克学長にもご臨席を賜り、他に教職員51名、大学院生89名（博士後期課程34名、博士前期課程55名）、ポスドク・学生17名、招聘研究者を加えると計164名が、小講堂を埋めました。

新しい試みとして1日目のカンファレンス終了後、三保のホテルにおいて、研究者と博士後期課程大学院生との泊まり込みの交流会を行い、著名な研究者と身近に接して会話する機会を提供しました。参加者は、両研究科長、若手教員6名、大学院生15名、ポスドク1名の計27名でした。



2日目は、はばたき棟3階第3会議室において、3名の教授により、本学の研究紹介が行われました。事業推進担当者など計34名が参加しました。野口博司教授（薬学研究科・薬学専攻）は、「Ⅲ型ポリケタイド生合成工学に基づく化合物ライブラリー構築」について、小林裕和教授（生活健康科学研究科・食品栄養科学専攻）は、「葉緑体—その進化と適応」について、鈴木隆教授（薬学研究科・薬学専攻）は、「スルファチドはインフルエンザA型ウイルスの複製に必須である」について講演いたしました。招聘研究者と活発な討議がなされました。

終了後、3名の研究者は、薬学研究科及び生活健康科学研究科の研究室を訪問し、意見交換を行いました。短い時間でしたが活発で有意義な研究交流が



3教授を囲んで懇親会を開催



懇親会の様子

できました。

2日間のスケジュール終了後は、市内のホテルにて懇親会を行いました。鈴木理事長、西垣学長も参加され計40名で、楽しいひと時を過ごしました。パークレー校の3名の先生方から、後日お礼状を頂きましたが、いずれの先生もとても満足していただき、また本学との交流をさらに深めたいとのことでした。本学の大学院生及び教員にも今後の研究への活力を与えることができた有意義なカンファレンスとなりました。ご協力いただいた教職員の皆様、特に若手教員、グローバルCOE担当の事務職員に心より感謝申し上げます。

グローバルCOEプログラム、合宿で事業の推進について意見交換

グローバルCOEプログラムでは、平成20年8月18日(月)から8月19日(火)にかけて藤枝市の潮生館で合宿して拠点の事業推進について意見交換を行いました。木苗直秀拠点リーダーを含む事業推進担当者22名、研究協力者2名に加え、アドバイザーの前学長廣部雅昭先生と西垣克学長が参加されました。健康



合宿幹事 渡辺達夫、武田厚司

長寿科学教育研究を強力に推し進めるために、拠点として、また大学として今後何をなすべきかについて、本拠点の独創的・画期的な研究基盤、拠点の重要性・発展性、プログラムが進行することにより見込まれる学術的社会的意義の3つのポイントを重点的に、夜遅くまで熱い討論をしました。さらに翌日は、今後、部局間の連携をさらに強めて、部局にまたがる教育や共同研究をいかにして推進するかなど、個人や専攻の立場で語り合いました。

この合宿を機縁として、生活健康科学研究科と薬学研究科を中心とした学内共同研究がより一層活発となり、グローバルCOEの研究成果を常に世界に発信できる大学となることを確信いたしました。

静岡健康科学英語研修プログラム

Shizuoka Health Sciences English Program (SHEP)

Louis Holschuh
American Language Program
The Ohio State University

Overview

This second offering of the SHEP program was scheduled for the full six weeks (June 16-July 25, 2008), allowing significantly more time for the participants to develop and refine their English skills and to more closely attain the English language mastery they need to participate meaningfully in international conferences conducted in English and to make effective conference presentations in English. In addition, living on campus and having American conversation partners and homestay families provided the participants with substantial opportunities to use English in informal conversational settings and practice the listening and speaking skills taught as part of the formal curriculum.

All language skills were taught and practiced within the six-week program, but with primary emphasis on listening, speaking, presentation, and discussion skills. To the extent possible, instruction took place within a broad health sciences context. The students' own research was used as the source of presentation topics.

Curriculum

Class met for three hours daily, Monday-Friday. In addition, students met with the instructor for an individual tutorial three times in order to review presentations. Class sessions focused on the following activities: listening and pronunciation basics, Listening to extended discourse, speaking accuracy, speaking fluency, reading and discussion, and presentation skills, and writing skills.

During the final two weeks of the program, three researchers from different areas of the health sciences presented lectures to the class, with follow-up discussion and questions.

Stephen Rosenstiel, The Ohio State University - The safety of dental amalgam

Karl Romstedt, Capital University - Cancer

Margaret Ginn-Pease, Capital University - Enzymes

A tour of the Ohio State medical rehabilitation facility, Dodd Hall, provided further practice in understanding extended discourse.



ビル先生の授業にて

Louis Holschuh 先生は、オハイオ州立大学アメリカンランゲージプログラムの英語講師で、6週間の授業を担当していただきました。（日本語要訳：国際関係学部 教授 吉村 紀子）

概 観

第2回目の実施となる2008年は、当初の計画通り、研修期間は6週間（6月16日～7月25日）であった。参加者（8名）は、昨年度と比較すると、国際会議に積極的に参加し、効果的なプレゼンテーションができる英語力の習得により多くの時間を費やすことができた。さらに、今回、キャンパス内の寮に生活し、アメリカ人のカンパセーションパートナーやホストファミリーがいたことは、参加者にとって、インフォーマルな会話が練習でき、クラスで習ったオーラルコミュニケーションを実践する、実質的な機会の提供となった。

6週間の研修では、すべての英語スキルを学習できるようにしたが、特に、リスニング、スピーキング、プレゼンテーション、ディスカッションのスキル向上に力を注いだ。指導では、可能な範囲において、健康科学の分野に関連したものを取扱った。学生たちの研究はプレゼンテーションのトピックとして活用した。

カリキュラム

授業は月曜日～金曜日、一日3時間であった。加えて、プレゼンテーションについて個人指導を行うため、チュートリアルを参加者一人に対し3回実施した。聴解力の向上をさらに図るため、録音された会話やアカデミックレクチャーを活用した。研修後半の2週間は、以下の3名による招待講演（健康科学関連）を実施した。講演では、参加者からの質疑応答、そしてディスカッションと展開して行った。

〔講演者と演題〕

Stephen Rosenstiel, The Ohio State University - The safety of dental amalgam

Karl Romstedt, Capital University - Cancer

Margaret Ginn-Pease, Capital University - Enzymes

また、オハイオ州の医療リハビリテーション施設（Dodd Hall）の見学を行ったが、英語での説明であったので、長い時間英語を聴く練習にもなった。

S H E P に参加して

薬学研究科博士後期課程2年 田代 京子

私は研究生活を送る中で、常々、英語の必要性を感じており、独学で英語の学習をつづけていました。主に、NHKのラジオ講座などの市販のテキストを用いて学習をしたり、定期的にTOEICを受けて、英語力をチェックしたりしていました。しかし、リ

スニング、スピーキングなどは独学に限界があると感じ、実際に生活で使える英語、研究生活で役に立つ英語を身につけたいと思っていました。そのような時に、S H E P の募集があり、私は迷わず申込みをしました。TOEFLのテスト、英語での面接を経て、私は、幸いプログラムに参加することができました。私は、リスニング、スピーキングの向上、そして、英語でのプレゼンテーション力をつけたいという目標を持ち、研修旅行に挑みました。

私たちのアメリカでの生活スケジュールの中心は、午前中、9時から12時まで3時間行われる講義です。講義の前半はテキストを用いて、発音の勉強をしたり、ディクテーションをしたりしました。日本で学習していたときのテキストは、ネイティブとはいえ、発音がわかりやすかったのですが、アメリカでおこなったディクテーションは、はじめは聞き取れたものの、回を重ねるに従って難しくなっていき、大変苦戦しました。講義の後半では、ある題材について



即興のスピーチ（黒板の前にいるのが筆者）



訪問先研究室でのディスカッション

文章を読んで、それについてディスカッションをしたり、impromptu speech（即興の3分間スピーチ）をしたりしました。そのほかにもいろいろとバリエーションに富んだ講義内容で、すべてが興味深いものでした。その他、全3回、オハイオ州立大学（OSU）の理系の講師の方々を招いてゲストスピーチを聞かせていただきました。先生方は、私たちが英語を学びに来ている学生であることを理解してくれて、大変わかりやすくお話をしてくださいました。

また、ほぼ毎週、全5回、プレゼンテーションの課題がありました。前半2回はインターネットで検

索した科学記事の紹介をし、3回目は私たちの行っている研究について背景を発表、4回目はポスター発表、そして、5回目は研究内容についてさらに詳しく発表するファイナルプレゼンテーションです。専門家ではない一般の方々を対象とするプレゼンテーションは大変難しく、とても苦労しましたが大変良い勉強になりました。私たちの担当をしてくださったBill先生はとても親切な先生で、常に私たちを励ましてくれました。

また、私たちはOSUの研究室を見学する機会もいただきました。私はCollege of PharmacyのChen先生の研究室を訪問しました。そこでは、学生さんのポスター発表を聞いたり、セミナーに参加したり実験を見学させていただいたり、大変貴重な経験をすることができました。

ファイナルプレゼンテーションが終わってから、farewell partyがあり、修了証書の授与式がありました。到着した当初は長く感じられたOSUでの研修期間ですが、終わるととても感慨深いものでした。OSUで過ごした貴重な6週間を活かして、これからも英語学習に励みたいと思います。

この場を借りまして、SHEPプログラムで大変お世話になったBill先生、Gary Whitby氏、中山先生をはじめ関係者の方々に深く御礼申し上げます。

現地学生との英会話を通じて

研究者が研究を進めていく上で、リーディング能力とライティング能力は欠かすことができません。また、自らの研究を世界に発信するためには、英語で世界各地の研究者と議論ができるリスニング能力とスピーキング能力も欠かすことができません。リーディングやライティングの能力は、授業や日々の論文読み、学術論文の作成を通して磨くことができますが、リスニングとスピーキングに関しては、実際に必要に迫られた英会話の経験を積める機会が少ないため、大幅な上達や意識改革はなかなか得られません。そこで私は、英語教育プログラムの一環としてオハイオ州立大学（OSU）との連携で開催される科学英語海外語学研修プログラム（Shizuoka Health Sciences English Program：SHEP）への参加を決意しました。また、昨年度に本プログラムに参加した学生による報告会での建設的な意見も、私が参加を決めた理由の一つです。

生活健康科学研究科博士後期課程2年 森 大気



カンバセーションパートナーと（右端が筆者）

昨年度から開始された本プログラムですが、今年は二つの点が昨年と大きく異なっていました。一つは、参加した博士後期課程学生の各々にカンバセーションパートナー（英会話などを決められた時間以

上行うことを契約した現地学生) が就いた点です。カンバセーションパートナーとなったOSU学生は、全員が車を所有しており、それぞれの参加者が色々なところに連れて行ってもらいました。例えば私は、オハイオで最も大きなショッピングモールやOSU学生御用達の格安の服屋、タイやメキシカンを含む様々な国籍のレストラン、ホームパーティーなどに連れていってもらいました。また、基本的にはカンバセーションパートナーと二人で行動することが多かったため、生の英会話を数多く体験できたことがとても大きな収穫でした。この経験を通して、他国の人とのコミュニケーションには、英語は必須であるということを強く実感させられました。変更されていたもう一点は、学生寮が借りられていた点です。学生寮には共同のキッチンや卓球台などが設置されていました。私たちが卓球を楽しんでいると、同じ寮内に住んでいた他国の留学生が話しかけてきて、ともにプレーするというようなスポーツを通じた出会いの機会が何度かありました。新たにできた留学生の友人たちは、カンバセーションパートナーと異なり、話すスピードにも遠慮が無く、その点も私の英会話能力の向上に繋がった要因の一つであると思います。

他国の方との英語でのやりとりにおいて必要なものは、OSUでの6週間の英語研修だけでは、完全には身につけられませんでした。しかし、研修に行く前には想像もできなかった現地の英語を存分に堪能することができました。この度の研修は、今後も英語という言葉が多用する私にとって、能力の面で

モチベーションの面でも非常に大きな糧となっていくはずですが、実際に私は、帰国後の現在もiPodを利用したリスニング強化プログラムに参加しており、これからもSHEPに参加して磨いた能力を伸ばしていきたいと思っています。

本プログラムは、プログラム終了後に参加者が答えるアンケートの意見を柔軟に取り入れることで改善され、年々良いものになっています。博士後期課程に在籍している学生が、このような質の高いプログラムに参加できる機会を逃す手はないと思いました。

最後となりましたが、SHEPの計画・運営に携わって下さったOSU関係者の皆様、静岡県立大学グローバルCOEプログラム関係者の皆様のご尽力に2008年度SHEP参加者を代表して、深く御礼申し上げます。



学内のテニスコートにて



名誉教授の称号授与

三輪匡男 先生 (前薬学部教授・生体情報分子解析学分野)



三輪匡男前教授は、昭和45年3月、静岡薬科大学大学院博士課程を修了され、同年、大阪大学蛋白質研究所共同研究員として研究活動に従事、昭和46年4月、静岡薬科大学助手に任用されました。その後講師に昇任し、昭和60年11月より博士研究員として米国テキサス大学HSC・サンアントニオ校生化学教室に留学され、帰国後、昭和62年には、新たに発足した静岡県立大学の薬学部講師、平成3年には助教として、また、平成7年から8年間は、米国テキサス州立大学HSC・サンアントニオ校生化学講座の客員教授として活躍されました。平成8年には薬学部の新設された臨床薬品学講座(現生体情報分子解析学分野)教授に昇任しました。

この間、各種委員会の委員及び委員長、薬学部長、大学院薬学研究科長、静岡県立大学評議員を歴任され、37年間の長きに亘り、静岡薬科大学、静岡県立大学で教育、研究ならびにその発展に貢献されました。

教育面では、薬科大学時代は生化学講座に所属し、薬学教育において重要な基礎専門科目である生化学の講義、実習、特別実習を分担し、教授昇任後は、医療薬学教育の中でも重要な臨床生化学、臨床検査学、薬物療法学などを担当し、尽力されました。

研究面では、生体膜構成複合脂質の生化学的研究に始まり、脂溶性メディエーターである血小板活性化因子PAFの病態生理学的研究に加え、世界ではじめてPAFの不活化酵素である血漿中のPAFアセチルヒドロラーゼ欠損家系を見出しました。さらにこの酵素欠損が代表的アレルギー疾患である小児喘息の重篤化に関わる先天的素因の一つであることを見出し、薬学領域のみならず臨床医学面からも多大な評価を得ています。

医療薬学分野の研究業績として、薬物代謝2相酵素であるグルクロン酸抱合酵素であるUGT1Aの酵素誘導に関わる転写調節領域に一塩基変異SNPを有する家系を見出しています。この変異遺伝子保有者は生体代謝産物や医薬品の対外排泄能力が低下し、薬物副作用との関連性について貴重な情報を臨床現場に発しています。

学外では、日本薬学会、日本生化学会、日本脂質生化学会、米国生化学・分子生化学会、米国薬理学会に所属し、日本薬学会理事、日本生化学会評議員、薬学教育協議会理事、幹事として、また平成18年度には日本薬学会東海支部長に就任し学会の発展に尽くされました。加えて、静岡県薬事審議会会長、静岡県薬剤師会教育協議会理事、静岡県発明協会理事、静岡県生活科学検査センター理事などを歴任され、静岡県の薬学・薬剤師領域の活動発展に貢献されました。

教員の人事、新規客員教授・准教授の紹介

■教員の人事

●採用	(9月1日付け)	●退職	(8月31日付け)
太田 尚子	看護学部 准教授	中島登美子	看護学部 教授
		熊坂 隆行	看護学部 助教

■新規客員教授・准教授

●教授	●准教授
中野 眞汎 前静岡県立大学薬学部教授 H.20.4.1~23.3.31	川森 文彦 静岡県環境衛生科学研究所 主幹 H.20.4.1~21.3.31
青木 和恵 静岡県立静岡がんセンター 看護部長 H.20.4.1~23.3.31	磯崎 泰介 社会福祉法人聖隷福祉事業団聖隷浜松病院腎センター長 H.20.4.1~21.3.31
小川 浩 財団法人環境整備教育センター調査研究部兼教務部主幹 H.20.4.1~23.3.31	橋野 憲親 独立行政法人工業所有権情報・研修館大学知的財産アドバイザー H.20.4.1~21.3.31
塚田 秀夫 浜松ホトニクス(株)PETセンター長 H.20.4.1~23.3.31	鈴木 鐵也 光産業創成大学院大学教授 H.20.8.1~23.3.31
中山 貢一 岩手医科大学薬学部教授 H.20.4.1~23.3.31	長嶋 正實 あいち小児保健医療総合センター 名誉センター長 H.20.9.1~23.3.31
中山 峰治 米国オハイオ州立大学准教授 H.20.4.1~23.3.31	
ジュリー・オサリバン・メイレット 米国ニュージャージー医科大学医療技術学部副学部長 H.20.4.1~22.3.31	立道 昌幸 昭和大学医学部准教授 H.20.4.1~21.3.31
リバ・トッガー・デッカー 米国ニュージャージー医科大学医療技術学部教授 H.20.4.1~22.3.31	鈴木 敬明 静岡県工業技術研究所 主任研究員 H.20.4.1~21.3.31
	茶山 和敏 静岡大学農学部准教授 H.20.4.1~22.3.31

「はばたき寄金」寄付者

はばたき寄金に寄付をしてくださった方(敬称略)

2008年9月11日受付分まで

赤井 周司、山田 静雄(以上薬学部)、木苗 直秀、中山 勉(以上食品栄養科学部)
 斉藤 和巳(経営情報学部)、下位香代子(環境科学研究所) ほか2名

奨学金をありがとうございました

「日本平留学生基金」入学祝金贈呈式

日本平留学生基金（代表イトウ秀雄氏）贈呈式が6月3日に本学で行われ、今年入学した学部留学生14名全員（国際関係学部9名、経営情報学部5名）に1人ずつ入学祝金1万円が贈呈されました。

日本平留学生基金は、県立大学に在学している主として東南アジアからの留学生に金銭的援助を行うことを目的として平成8年にイトウ秀雄氏の還暦記念に設立された基金であり、今年で13年目を迎えました。また、イトウ氏の基金募集の趣旨に賛同した協力者は500を超える個人・団体のぼります。

贈呈式でイトウ代表は、「人生の宝は若さだ」と述べられ、「若さを維持する努力を続けて欲しい」と挨拶されました。留学生からは、国際関係学部1年クマール・ディーパクさんが代表してお礼の言葉を述べました。



「富士川町静岡県立大学留学生就学奨励金」交付式

富士川町文化事業振興会が支給する就学奨励金の交付式が6月7日、富士川町中央公民館で行われ、学部1年の留学生14名全員に1人あたり5万円が支給されました。

この就学奨励金は、本学に在学する優秀な留学生に就学奨励金を交付し、留学生の教育・研究活動を支援するとともに、富士川町が主催する事業を通じて、留学生と富士川町民との相互の心の触れ合いを深め国際交流を図ることを目的としています。

交付式では坪内伸浩富士川町長が「大きな夢や目標に向かって頑張っている」と挨拶され、留学生を代表して国際関係学部1年ウィクラマツゲ・ローチャナさんが「奨学金を無駄にすることのないよう一生懸命勉学に励みます」とお礼の言葉を述べました。



地元企業からの奨学金

奨学生を募集する企業がそれぞれ論文テーマを定め、応募論文が優秀であると認められた生徒に贈られる奨学金です。

「万城食品奨学金」授与式

㈱万城食品奨学金授与式が6月17日に三島市の万城食品本社にて行われました。

本奨学金は、㈱万城食品により中国出身の留学生への奨学金支給を目的として設立され、今年度で12回目を迎えました。

「奨学金を利用して在学期間中、何について勉強したいか」を論文テーマに募集し、食品栄養科学部1年の金美日さんが選ばれました。

授与式では、㈱万城食品の米山寛代表取締役から目録が贈られ、金美日さんがお礼を述べました。



「静岡ガス奨学生」認定証授与式

静岡ガス(株)奨学金授与式が6月17日に静岡市駿河区の静岡ガス(株)本社で行われました。

本奨学金は、静岡ガス(株)により、社会有用の人材育成に寄与することによって地域社会への貢献を図ることを目的に創設され、今年度で9回目を迎えました。

「自分自身の将来像について」を論文テーマに募集し、食品栄養科学部4年市川達也さん、看護学部4年三窪佳苗さんが選ばれました。

授与式では、静岡ガス(株)岩崎清悟取締役社長から認定証を贈られ、「地域に密着した助産師になれるよう頑張りたいと思います。」(三窪さん)とお礼の言葉を述べました。



「TOKAI奨学金」授与式

(株)TOKAI奨学金授与式が6月25日に本学で行われました。

本奨学金は、(株)TOKAIにより地域に密着した企業の事業の一環として設立され、今年度で17回目を迎えました。

「人間生活と水」を論文テーマに募集し、生活健康科学研究科博士前期課程1年天野豪春さん、国際関係学研究科研究生望月良憲さん、国際関係学研究科修士課程1年趙星慧さんが選ばれました。

授与式では、(株)TOKAIの真室孝教常務取締役から認定書を贈られ、「静岡で生まれ育った私が、アフリカをフィールドとして人間安全保障に関する研究にかかわることができます」(望月さん)など、奨学生がお礼の言葉を述べました。



「静岡信用金庫奨学生」奨学金授与式

静岡信用金庫奨学金授与式が7月4日に静岡市葵区の静岡信用金庫本部で行われました。

本奨学金は、地域社会の発展に貢献する静岡信用金庫の基本方針に従い、次代を担う人材育成を目的に設立され、今年度で12回目を迎えました。

「あなたの考える少子化時代における世の中の変化と若者の役割について」等を論文テーマに募集し、食品栄養科学部2年袴田京さんと国際関係学部4年の杉村明子さんが選ばれました。

授与式では、静岡信用金庫の岩崎常務理事から認定書を贈られ、「一層勉学に励み、自身を持って世の役に立てる仕事につきたいです。」(袴田さん)などとお礼の言葉を述べました。



「東海澱粉国際交流奨学基金」奨学金授与式

公益信託東海澱粉国際交流奨学基金奨学金授与式が7月24日に静岡市葵区の東海澱粉(株)本社で行われました。

本基金は東海澱粉(株)により静岡県内の大学院に在学しているアジア諸国からの留学生への奨学金支給を目的として平成10年4月に設立されました。

「私の大学院での研究目的」「私の大学院での研究成果」を論文テーマに募集し、同基金の運営委員会の審議を経て、本学からは生活健康科学研究科博士前期課程1年林凌さん、国際関係学研究科修士課程1年唐敏さん、同研究科修士課程1年巴・那楚格さん、経営情報学研究科修士課程1年レー・ティ・トゥット・チンさんの4名が採用されました。

授与式では東海澱粉(株)の神野建二社長から目録が贈られ、奨学生それぞれからお礼の言葉を述べました。



「清和海運奨学金」授与式

清和海運(株)奨学金授与式が7月28日に本学で行われました。

本奨学金は、清和海運(株)により、地域に密着した企業として経済的に就学困難な学生の援助をすることを目的に設立され、今年度で6回目を迎えました。

「静岡県の物流におけるインフラの課題と今後の可能性」を論文テーマに募集し、経営情報学部3年古川聖也さん、薬学研究科博士前期課程2年片山百合恵さん、同研究科博士後期課程2年畑中剣太郎さんが選ばれました。

授与式では、清和海運(株)の宮崎総一郎代表取締役社長から認定証を贈られ、「自分に厳しく、より一層勉学に励み、自己を高め、未来の医療に貢献できるよう鋭意努力する所存であります。」(畑中さん)など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。



「天野回漕店奨学金」授与式

(株)天野回漕店奨学金授与式が7月31日に本学で行われました。

本奨学金は、(株)天野回漕店により「共存共栄」の経営理念に沿って地域社会の発展に努め、地元静岡県の学生の奨学奨励に寄与することを目的に設立され、今年度で14回目を迎えました。

「自国と日本文化の違いについて。又、日常生活で感じていること。」等を論文テーマに募集し、国際関係学部2年周亜南さん、経営情報学部2年ティン・ティン・トゥンさん、が選ばれました。

授与式では(株)天野回漕店の小長谷修誠取締役社長より目録が送られ、周さんが「静岡で勉強できることを幸せに思っています。ますます勉学に励むため、大事に使います。」とお礼の言葉を述べました。



●地元企業等による本学学生への奨学金（返還義務なし）

企 業 名 等	給付金額	支給期間	応 募 資 格	20年度採用人数
日本平留学生基金	年額 1 万円	一時金	外国人留学生のうち学部新入生	14名
富士川町文化事業振興会	年額 5 万円	一時金	外国人留学生のうち学部新入生	14名
(株)万城食品	月額 5 万円	1 年間	中国からの留学生のうち学部 1 ～ 2 年生	1 名
静岡ガス(株)	月額 5 万円	1 年間	学部生・大学院生	2 名
(株)T O K A I	月額 5 万円	1 年間	全学生（研究生、聴講生を含む）	日本人学生 2 名 留 学 生 1 名
静清信用金庫	月額 3 万円	1 年間	静岡県内出身の学部生	2 名
東海澱粉(株)	月額 3 万円	1 年間	アジアからの留学生のうち修士大学院生	4 名
清和海運(株)	月額 5 万円	1 年間	日本人学生(研究生、聴講生を含む)	3 名
(株)天野回漕店	月額 5 万円	1 年間	東南アジア・中国からの留学生のうち学部 2 ～ 3 年生	2 名
スルガ奨学財団	月額 5 万円	2 年間 (3、4 年次)	アジアからの留学生のうち学部 2 年生	1 名 (支給は20、21年度)
清水ロータリークラブ	年額 5 万円	一時金	外国人留学生のうち他の奨学金を受給していない学部新入生	9 名 (19年度実績)

この他にも様々な奨学金がありますので、詳細は

<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/campuslife/life/002/index.html> をご覧ください。

お問い合わせは 054-264-5008（学生室）まで

International Exchange Programs 国際交流

リール政治学院留学体験記

国際関係学部 国際言語文化学科 4年 松浦 愛子

キャンパスライフ

2007年9月から2008年6月にかけて、私はフランス・リール政治学院（I E P）でフランスの政治・現代社会・宗教・文学について学びました。もともと政治学が専門でなかった私は、授業内容とフランス語の両方に大変苦労しました。それぞれの授業についていくためには工夫が必要でしたが、多くの人に助けられ、海外で学ぶコツを身につけることができました。

特に面白かったのは宗教の授業です。ジャーナリストでもある講師の先生が、リールにあるシナゴグ・モスク・カテドラルの見学に連れて行ってくださいました。フランス生活では身近にありながら、私にとってユダヤ教やイスラム教はやはりどこか遠い世界でした。しかし地元の小さなシナゴグや、民家の間に建つモスクはどこか庶民的で、そこの方々は私達からの質問に快く答えてくださいました。それから同じ街に住む彼らの存在がとても身近になりました。

他にも留学生対象の授業では、教授がパリの上院と下院の内部を見学できるよう、バスツアーを今年初めて企画してくださいました。フランス政治の場を直に見て、更に興味が深まりました。

フランスと「自分」と日本

この留学中、私はフランス語を十分に話せない分「自分に何ができるか」「どうすれば相手を楽しませることができるか」を必死に考えていました。そう



I E Pの留学生30人を寿司教室に招待

するうちに、「自分が日本人である」ということを自然と意識するようになりました。日本について聞いてみると、たいいてい人は「テクノロジー・礼儀正しさ・勤勉さ・マンガ・アニメ・寿司…」と答えます。一般の人にとって、日本は私の想像以上に遠い国でした。ですからリールは、「フランス」と「自分」と「日本」についてもう一度考え直すのに良い環境でした。

本当に日本人が少ない街ですが、リールの日仏交流団体を通し、結婚や転職などでリールに住んでいる方々とお話できました。私はそこで、「学生」と

は違った視点で見る「フランス」を知りました。

他にもフランス人からの依頼で、リールへ舞踏の公演にきた日本人にインタビューし、リール第1大学のラジオ放送でその内容を紹介しました。身振り手振りの通用しないラジオでフランス語を話すのは緊張しましたが、メディアを通じて日本の文化を海外に紹介する良い経験となりました。

それまで日本の「内側」から日本を見ていましたが、「外側」からの視点を持てるようになったことは私にとって大きな収穫でした。



留学生が初めて作った巻き寿司

「国境」を越えて

リールはベルギーとの国境の町です。簡単に地下鉄で国境まで行くことができました。島国・日本で生まれ育った私にとってはそれが初めての「国境」でしたが、普通の町中に小さい道路標識が立っているだけでした。あまりのあけなさに拍子抜けしましたが、ヨーロッパでは国と国とがこうして隣り合っているのだと知りました。ヨーロッパの人々がEU構築に真剣に取り組む理由も、このときリアルに感じられました。

又、リールは交通の拠点です。私は、バックパッカー一つでヨーロッパ11カ国（フランス・スペイン・バチカン・イタリア・モナコ・ベルギー・オランダ・ポーランド・ドイツ・スウェーデン・イギリス）を飛び回りました。各地の文化遺産や美術館を山ほど回りましたが、I E Pの友人の実家にお邪魔し、スーパーや公園などにも足を運び、地元の人と話をし、その土地の「生活」を感じてきました。I E Pの留学生達から彼らの母語をフランス語で学んだので、フランスとスペインとイタリアでは文化も言語もとても似ていることを再確認できました。最初は納得いきませんでしたが、彼らにとってお互いの言語は「方言」同様だそうです。

それまで「フランスはフランス」「スペインはスペイン」…と分けて考えていましたが、今回の留学でヨーロッパに対する見方が大きく変わりました。ヨーロッパ文化コースで学ぶ私にとって、それは大きな発見でした。

これからも広がる世界

この留学で世界中に150人余りの友人ができ、今でも連絡を取り合っています。



初夏の公園でドイツの友人と

彼らの母国のニュースには自然と目がいきます。先日の北京オリンピックも然り、これまで以上に多くの国に注目しました。

フランス・リール政治学院での9ヶ月に及ぶ留学体験を、短い報告にまとめる事は、期間中の数々の出来事を考えると到底不可能です。この場ではほんの一部分を切り取って、「さわり」だけ紹介します。

悩みは尽きず・・・

一番辛かったのは食事でした。県大の学食をこよなく愛していた私にとって、ファイン定食大盛りから長いフランスパンへ、そして「日替わりラーメン」から「日替わり自炊パスタ」への切り替えは、一時期の斬新さはあったものの、直ぐに飽きの訪れを招きました。どうしても日本米が食べたくなった私は、鍋で炊く米にも我慢できず、思い詰めすぎてとうとう怪しげな炊飯器を手に入ってしまったほどです。しかし皿に盛ったごはんをかきこんだ時の感動は、炊飯器の怪しさを瞬時に吹き飛ばしてくれました。どうやら私はコメ依存症の様です。

何とも微妙な天気にも悩まされました。悩まされ続けて気が病んでしまいそうなほど、どんよりとした曇りの日が続きました。そう、言うなれば冬の日本海状態です。ただそれで雪が降るならいいのですが、降るのは霧雨ばかり、厭味ったらしい天気です。傘は差すほどじゃない、でも地味に濡れる。



リールには様々な国から学生が集う

気付いたら手に持っていた資料にじんわりシミができています。そんな事はしょっちゅうでした。そしてやたら寒いのです。フランスに降り立ってからの1カ月は、悩まされるどころか本当に寝込んでしまいました。9月なのに白い息が出る状態に耐えられなかった私は、白旗を振り続けながら大学へ通っていたようなものでした。

そして本業の勉強、これには苦戦の連続でした。

今も彼らに、母語を教わっています。私はスペイン語・イタリア語・ドイツ語に挑戦中です。逆に、私は日本語を教えています。ちょっとした日常表現やくだけた言葉を織り交ぜるだけで、会話を何倍も楽しくする技を身につけました。完璧でないからこそ好感が持てますし、相手の母語を話そうとすることは、相手に寄り添うことであると思っています。

I E P留学で得たものは、私の宝です。この経験を何らかの形で今後の生活に生かしたいと思っています。

最後に、私にこのような素晴らしい機会を下さり、支え続けて下さった県立大学の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

国際関係学部 国際関係学科 4年 大沼 廉

大関昇進後の栃東の闘いぶりのようでもありました。押しては引かれ、引いては押され・・・授業時の教授の講義の内容が「Alors, ○*□?%▽\$, ! ☆ Σ & # @, n'est ce pas? (～でしょ)」のように聞こえる有り様。同意を求められても困ります、教授。全く分からず隣の人のノートを借りても、筆記体が宇宙文字のように見えて解読不能。家に帰って推測される単語を当てはめながら解読する様子はまるで、古代文明を発掘して解読に夢中になっている学者さながらでした。

21世紀はすごい・・・

まだまだ苦難はたくさんあったのですが、これ以上書くと「広報誌 はばたき」が「悩み相談 はばたき」になってしまいそうなのでここからは印象に残った出来事も書き加えます。

授業を受けている時に驚いた事は、ノートPCでノートを取る学生が全体の1/4を占めていたという事実です。ワードで必死に打ち込む学生と、その隣でペンを使って書き込む学生を揃って見ると、21世紀はすごい時代だなと思う一方、小学校中学年の頃授業でロケット鉛筆を使って良いか否かについて学級会で



さすがEU、国境には標識しかない

でもめた事を思い出しました。ロケット鉛筆どころか、PCの時代へ。ものすごい時代に生きているのだと実感しました。またある漫画に登場していた、『『ノート貸して』から『メモリーコピーさせて』への変貌』が現実になり、とても驚きました。

若者の流行最前線にも驚きました。巷の若者を虜にしているもの、それはテクトニックというダンスとG I カットです。テクトニックというのは、いわゆ

る「パラパラ」をちょっとカッコよく見せようと懸命になったダンスといったところでしょうか。これを駅前や広場などでゲリラライブのように行うものですから、傍から見ると危ない宗教集団のように私には見えました。そしてG Iカットですが、何故か10代の若者を中心に大流行。妙にいかついですが、床屋ではG Iカットのオンパレードで、店から出てくる人がみな軍人に見えました。しかしながら、母国とは違った流行の形に興味津々でもありました。

さてここまで述べて参りましたが、決して勉強もせずふらふらしていた訳ではありません。静岡県立大学から派遣された一人の日本人学生として、プライドを持って日々勉学に励んでおりました。思えばこうして充実した日々を送る事が出来たのは、選抜して頂いた国際関係学部諸先生方及び学生部スタッ

フの皆様のお力添えあつてのことで御座います。誠にありがとうございました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。最後になりましたが国際関係学部の後輩諸君、本気になって留学したいなら交換留学生への応募をするべきです！



学生寮近くの通りを望む

「ニューカッスル大学夏期語学研修に参加して」

国際関係学部 国際言語文化学科3年 鈴木 あや

今回のニューカッスル大学での夏期語学研修を通して、英語力はもちろん、たくさんのものを手に入れました。たった3週間、されど3週間。とても充実した3週間になり、大学生活のこのタイミングでこの研修に参加でき、本当に良かったと思います。

ニューカッスル・アポン・タイン市はイングランドの北東部にある都市です。その地域で最大の都市ですが、自然も多く、景色はとても綺麗です。美術館や音楽ホール、劇場など、芸術的な感性を磨くのにもとても良い場所でした。ニューカッスル大学はイギリスの大学総合ランキングで毎年上位に入り、先述したような良い立地条件もあって、イギリス人学生がもっとも憧れる大学のひとつらしいです。

研修にはドイツ、スペイン、フランス、といった

ヨーロッパ圏からロシア、サウジアラビア、中国、タイ、韓国……と本当にさまざまな国から来ているさまざまな年代の人たちと出会い、自国や自分

を見つめ直すとても良い機会になりました。彼らとは日常会話はもちろん、お互いの国のことや、世界各国の問題についても話しました。国が違っても英語という共通のツールを使うことによって会話ができて、コミュニケーションの拡大が図れるということを実感しましたが、日本語ではこう言いたいのに英語では言えない、といったことが一番悔しかったので、今回出会った外国の友だちとはもちろん、これから出会う海外の人とももっと円滑にコミュ



クラスメートと一緒に

ニケーションをとりたいと思いましたし、そのためにも英語をもっとしっかり学ばなければと強く感じました。

授業のプログラムはしっかりしており、午前中の3時間のプログラムでは実践的な英語を学べました。その日に習ったイディオムや単語をその後の会話ですぐに使い、自分のものにする学習法を実践できたのは海外研修ならではのことでした。午後の2時間のプログラムでは複数の授業の選択肢の中から自分の興味ある授業を取ることができ、英語力はもちろん、興味関心のある分野についても深く知ることができました。

私は大学の寮で3週間を過ごしたのですが、そこには私たちと同じ研修をうけている人はもちろん、大学に通っている人や、違うコースを取っている人たちも暮らしており、そのような人たちの話が聞けたこともいい刺激になりました。また寮のキッチンでお互いの国の料理を作り、持ち寄りパーティをしたことや、夜集まって話をしたりゲームをしたりしたことなど、さまざまな国のさまざまな年代の人たちとの共同生活の経験も、とても良い思い出です。

研修中は毎週パーティやバス旅行などのアクティビティもあり、皆と思ひ切りはしゃぎ、友情を深め



自国の料理でパーティー

たり、ニューカッスルだけでなくほかの街の文化に触れることができたり、イングランドとスコットランドの違いを実際に見ることができたりと、

勉強だけでなく、イギリスという国をしっかりと楽しむことができました。

最後のお別れの際はとても寂しかったですが、その時にドイツの友だちが「これでプログラムは終わりだけど、これで僕は最後じゃないんだよ。これが始まりなんだ。」と言ってくれた言葉が忘れられません。行く前には航空券の手配や、大学との手続きを全て自分でやらなければならないことに不安がありました。でも、周りの人に助けってもらいながらも、何とか自力でやり通せたことは良い経験となり、自信になったと思います。

この3週間の経験を通して知り合った他国の多くの友だちとの関係は、もちろんこれからも続いている

きますし、得た多くの経験もここで満足して終わりではなく、これからにつなげ、次のステップへと進んでいきたいと思っています。



修了書をもらい、先生と

オハイオ州立大学語学教育インターンシップ

国際関係学研究科修士課程 1年 仲野有紀子

私は、アメリカの大学で他国から来た生徒たちに英語を教えるという挑戦への不安と、抱えきれないほどの高揚感と希望を胸いっぱいにつめて、オハイオ州立大学（OSU）に旅立ちました。初めてのアメリカ、初めての短期留学、初めてのインターンシップ、全てがキラキラしていて、出会った人、物、何もかもが魅力的でした。一面家族の写真で埋め尽くされた指導教諭のChrisのオフィスを初めて見たとき、彼本人に会う前からその人柄に心があたたかくなりました。“Cool!” が口癖の彼は、常に私を生徒というよりは英語教師の仲間として扱ってくれました。彼がいなければ、私は自分自身の3週間の行く先を見失っていたと思います。他の先生方も私を励まし、自信を与えてくれました。教壇に立ち、自分のやりたいことを迷わずまっすぐに行うことが出来たのは、先生たちのおかげです。

私の担当したクラスの生徒はリビア出身が6名、プエルトリコ出身が1名の計7名でした。彼らはとてもtalkativeで、日本の英語指導現場では決して見られないクラス風景がそこにありました。自分のミスを恐れず、仲間のミスをフォローし、常に積極的にクラスに向かう姿勢は、教師としてとてもありがたく、同時に日本の現状を思っただけでもなりました。彼らの“負けず嫌い”と言えるほどの積極性と、私を思いやる優しさが、私の授業を成功に導いてくれたことは疑う余地もありません。カンパセーションパートナーのEmilyは現在学部2年生で、マーチングバンドでドラムをやっています。どんなに忙しくても勉強も音楽も一生懸命やる彼女のことを、私は心から誇りに思っています。3週間、毎日Emilyとその友人、私の計7名で夕食をとっていました。彼らと毎日真剣な話で悩んだり、くだらない

話で大笑いしたりしていたことで、私が今まで日本でやってきたことは間違っていなかったのだということを感じることができました。将来、高校の英語教師になるという夢をかなえた時に、教室だけでなく、いろいろな体験を通して英語の学習ができることを生徒たちに伝えたいと思います。他にもチップの難しさ、未だに色濃く残る人種問題、環境問題や格差の現状など、実際にその場を訪れなければ実感できない事柄をたくさんこのインターンシップ留学を通して経験しました。アメリカが消費社会というのは本当で、大量の無駄な消費が日々繰り返される中、大学沿いのハイストリートでは歩く人に物乞いをしたり、食べるものがなくゴミ箱をあさったりする人たちが生活していました。楽しいことばかりではなく、このような悲しい現実を実際に目の当たりにすることができたことも、“英語”を教えようとする自分にとって、貴重な経験となりました。

OSUで出会ったすべての人が、私の夏を輝かせてくれました。この夏のインターンシップ経験、彼らとの思い出を懐かしまない日はありません。この機会を与えてくださった中山先生、吉村先生、私の家族、そしてChris, Jessy, Faye, 生徒たち、Emily, 他にも私と出会ってくれた全ての人たちに心から感謝しております。ありがとうございました。



カリフォルニア州高校生のための日本語研修プログラム

プログラム企画コーディネーター 澤崎 宏一（国際関係学部講師）

2008年6月30日から7月25日までの4週間、今年で2年目となる「カリフォルニア州高校生のための日本語研修プログラム」が実施されました。今年は4人の高校生が参加しました（コリーナ・チャベスさん、ミユキ・ハタさん、アリソン・ハタさん、ティファニー・タンさん）。毎日の日本語研修に加え、県大の授業訪問や県大生とのLP（ランチパートナー）・CP（カンパセーションパートナー）活動など、様々な形で県大生との交流が行われました。以下、カリフォルニア州高校生からの感想、そして彼女たちと実際に触れあった人たちのことをいくつか紹介します。

カリフォルニア州高校生のための日本語プログラム・スケジュール

1週目	9:10-12:00	12:00-13:00	13:10-14:00	14:40-16:10	16:20-
6/28 Sat	成田空港出迎え			* LP: ランチパートナー CP: カンパセーションパートナー	
6/29 Sun	全体オリエンテーション&市内見学				
6/30 MON	全体オリエンテーション	LPと昼食	全体オリエンテーション&授業ガイダンス		
7/1 TUE	日本語授業	LPと昼食	授業訪問（澤崎ゼミ）	学長室訪問	
7/2 WED	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	歓迎会
7/3 THU	日本語授業	LPと昼食	特別授業（お茶に関する講習）	CPと活動	
7/4 FRI	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	清水七夕祭り見学
2週目					
7/7 MON	日本語授業	LPと昼食	静岡高校訪問		
7/8 TUE	日本語授業	LPと昼食	授業訪問（津富ゼミ）		
7/9 WED	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	
7/10 THU	日本語授業	LPと昼食	静岡東高校訪問		
7/11 FRI	日本語授業	LPと昼食	授業訪問（日本学研究A）	特別講義（能入門/岩倉先生）	
3週目					
7/14 MON	日本語授業	LPと昼食	清水東高校訪問		
7/15 TUE	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	
7/16 WED	日本語授業	LPと昼食	清水南高校訪問		
7/17 THU	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	
7/18 FRI	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	
4週目					
7/21 MON	海の日（休校日）				
7/22 TUE	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	授業訪問（湖中ゼミ）	
7/23 WED	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	
7/24 THU	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	日本語授業	修了式&送別会
7/25 FRI	フィールドトリップ：富士山・白糸の滝・浅間神社				
7/27 Sun	成田空港見送り				

ハタ・アリソン（プログラム参加者）

この4週間はすごく楽しかったです。たくさん日本語と日本の文化をまなびました。先生はとてもおもしろいです。たくさん日本語をおしえました。いつも日本の文化をせつめいしました。ほんとにありがとうございました。静岡県立大学の学生はしんせつでした。いっしょにおんがくと日本のはいゆうを話しました。とても楽しかった。みなさんは私をてつだいました。ありがとう。すばらしいおもいでができました。



授業訪問_湖中ゼミ

ティファニー・タン（プログラム参加者）

この4週間はとても楽しくて面白かったです。静岡はすごいです。県大の皆さんは優しくかったです。本当にありがとうございました。毎日、日本語を学んで、CPと話しました。CPの皆さんはとてもしんせつな人です。ゲンコミのスタッフさんはこのすばらしいけいけんを下さって、本当にありがとうございました。森先生はいい先生です。皆さんに会えて良かったです。皆さんとまた会いたいです！私の夏はとても楽しかったです。ありがとう！！

畑・ステファニー・美雪（プログラム参加者）

4週間ぐらい私たちは、静岡にいます。皆さんは、しんせつで、面白いと思います。よくCPに、私達は、おかしと飲み物をもらいました。昼ごはん中、食べ物を買うことを手伝いました。新しい友達といろいろな言語を話しました。皆さんはあたまが良いと思います。いっしょに、歌って、笑って、浴衣を着て、山Pを話しました。たくさんしました！毎日楽しかったです。本当にありがとうございました。わすれません。

コリーナ・チャベス（プログラム参加者）

This past month has been absolutely amazing. I've crammed in so much new Japanese and made such great new friends. The students at 静岡県立大学 are great ambassadors to foreign students. Both the staff and the students are very patient and intellectual and it was a great pleasure to be here. I will miss the beautiful campus and the amazing people, but I will be back for sure! みなさん、ありがとうございました。幸梨奈より

乾沙王理 食品栄養科学部1年（CP/LP協力者）

私は、カンバセーションパートナーに参加して、本当に良かったと心から思います。

それには3つの理由があります。1つ目は、この活動を通して、英語への意欲が湧いたことです。私は今まで英語という教科が苦手で、勉強意欲も湧きませんでした。しかし、留学生4人だけでなく、国際関係学部の人々等の“英語が使える人々”と出会い、自分の英語が使えないことを痛感しました。2つ目は表情やジェスチャーの重要性を感じたことです。たとえ、言葉が通じなくても、身振り手振りは共通だったりするものです。

相手に伝えようとする意志が大事なのだということを気付かされました。そして、最後にはなんとといっても、多くの人々と出会えたことです。普段の学校生活では決して知り合うことのないはずだった先生や先輩、もちろん留学生とも出会えて、貴重な話を聞くなど体験したことは、一番の私の収穫です。このように、この活動は自分への良い刺激になったと思います。



LPと学食で

緒方祐次郎 国際関係学部4年（CP/LP協力者）

今年2年目となる日本語研修プログラムで私達はCA高校生のカンバセーションパートナー（CP）として手伝わさせていただきました。はじめ、不安げに片言の日本語を話していた4人の高校生も、ほんの一ヶ月間で日本について堂々とプレゼン出来るまでに成長していました。不安とストレスもあったと思いますが、それ以上に日本への興味心が強く、CPの時間では折り紙を折ったり、日本の祭りについて話し合ったりと日本の文化をたくさん吸収していきました。CPとして教え足りない部分もありますが、この経験を今後につなげてもらい、このプログラムが彼女達と日本をより結びつけるものになれば嬉しく思います。今回私達CPはサポートする立場でしたが、彼女達から色んなことを逆に学ばせてもらい、互いに成長した一ヶ月だったのではないかと感じております。最後に、今回お世話になった先生方にも深く感謝しております。

遠藤ゆか 国際関係学部2年（訪問先授業「日本学研究A」受講生）

日本学研究の授業にカリフォルニアから来た学生が参加して一緒に百人一首を体験することになり、百人一首を全く知らない彼女たちがゲームを出来るようにするため、百人一首とは何か、歴史的仮名遣いの読み方、遊び方などを一ヶ月弱かけて準備しました。

いざゲーム当日、カリフォルニアの学生とゲームをやっても、きっと取り札を譲り合ったりするゆるい感じになるんだろうな、というような失礼なことを、実際にゲームをしてみるまでは考えていました。しかし実際にやってみると、日本人の私よりカリフォルニア学生の方がよっぽど取り札を見つけるのが早く、時には上の句の最初の三文字ほどを聞いたところで札を取れることもあるくらいでした。最初は余裕綽々の態度でゲームに臨んでいた私でしたが、途中からは汗が流れ落ちるほど本気になり、心からゲームを楽しむことができました。百人一首はカルタなどと比べて日本人にとっても難しいゲームだと思っていましたが、国を超えて一緒に遊べるものなんだということを知りました。



授業訪問_日本学研究A

大塚花野 国際関係学部3年（訪問先ゼミ津富ゼミ生）

カリフォルニアの高校生が私たちのゼミに来たのは7月8日、そして前日の7日まで清水の商店街では七夕祭りが開催されるということでした。そこで、日本とアメリカのお祭りの違いについて話し合おうということになりました。まずは彼女たちに日本の祭りを知ってもらおうべく、ゼミでの話し合いの準備として彼女たちと共に七夕祭りを見学に行きました。

8日のゼミでは、この時に感じた日本の祭りのいいところや、もっとこうだったらいいなどの意見を聞きました。「日本の祭りはとても楽しい。アメリカの祭りはつまらない」という話もありました。私たちが思い描くアメリカの祭りというと、出店やイベントが多く、パレードが練り歩くといったとても愉快的なものでしたので、彼女たちの話はとても意外でした。

また話は、国民性にまで深まりました。彼女たちは「日本人には絆がある。アメリカ人にはそれがない」と言います。アメリカ人は、小さなコミュニティがたくさんあって、コミュニティの中での交流に留まることが多いそうです。一方彼女たちから見た日本人は、大きなコミュニティがあってそこには絆があるということでした。またその他にも日本とアメリカの違いについてたくさん感想を言ってくれました。日本人は閉鎖的で、小さなコミュニティで群れる人種かと思っていた私たちですが、アメリカ人から見たら日本は社交的で、コミュニティが大きく隔たりがない、いい社会だということでした。彼女たちとは、とても深い部分まで突っ込んだ話ができて、日本にいながらにして強いカルチャーショックを受けることができました。

彼女たちは、帰国後も私たちのゼミ活動を気にし、応援の言葉をかけてくれます。勉強しに来た彼女たちから、逆に学んだことはとても多く、本当に感謝しています。このような濃い交流ができたのも、澤崎先生はじめ多くの方のご協力があったおかげです。本当に、ありがとうございました。



修了書授与



県大ユニバーシティプラザで

宮永一家（ホストファミリー）

約一ヶ月間カリフォルニアからの留学生コリーナのホストファミリーを受けました。初めは家族とコリーナが互いに遠慮し合っている感じがありましたが、コリーナの明るく奔放な性格のおかげですぐに打ち解け、本当の家族のようになりました。家にいる殆どの時間をリビングで家族と過ごし、テレビを見ながら日本語の説明をさせられる事もありました。また、コリーナは歌う事が大好きで、毎日のように友達とカラオケに行っていたのが印象に残っています。

毎日が楽しく「あっ」と言う間に時が過ぎてしまい、別れはとても辛く寂しいものでした。私達は再会を約束し彼女を見送りました。コリーナと過ごした日々は生涯忘れる事はないと思います。県大のこのプロジェクトのおかげで、新しい家族と有意義な時間を過ごす事ができ感謝しています。ありがとうございました。

皆さんご協力ありがとうございました。（スタッフ一同）

2008年度プログラムスタッフ

企画・運営：澤崎宏一（国際関係学部講師）、寺尾 康（同教授）
 日本語講師：森 陽子（関西外国語大学）
 ティーチングアシスタント：熊谷美登理（国際ことば学院）
 事務アシスタント：鈴木淑乃
 事務局本部：言語コミュニケーション研究センター長 吉村紀子（国際関係学部教授）

研究助成採択

平成20年度財長瀬科学技術振興財団助成

研究者：薬学部 教授 菅 敏幸

研究課題：生体機能解明を指向した生理活性天然物の合成

平成20年度財喫煙科学研究財団

研究者：薬学部 教授 山田静雄

研究課題：ニコチンの神経伝達調節作用に関する研究 排尿機能におけるニコチン性受容体の役割と創薬

平成20年度財静岡総合研究機構学術教育研究推進事業費補助金（静岡県S O E助成）（継続）

研究者：薬学部 教授 伊藤邦彦

研究課題：生活習慣病の予防や薬物治療に有用な遺伝子マーカーおよびバイオマーカーに関する研究

平成20年度日本学術振興会・科学研究費補助金・特別研究員奨励費

研究者：薬学部 准教授 阿部郁朗

研究課題：生合成酵素を用いた非天然型新規化合物ライブラリーの構築

平成20年度財三島海雲記念財団学術研究奨励金

研究者：薬学部 准教授 阿部郁朗

研究課題：ポリフェノールの生合成工学に関する研究

平成20年度財山田科学振興財団研究援助金

研究者：薬学部 准教授 阿部郁朗

研究課題：超天然型新規ステロイド骨格の創出

平成20年度(独)科学技術振興機構産学共同シーズイノベーション化事業（顕在化ステージ）

研究者：薬学部 講師 竹元万壽美

研究課題：高機能性を有する紅茶テアフラビンのバイオ生産システムの開発

平成20年度財日本科学協会笹川科学研究助成

研究者：薬学部 講師 稲垣真輔

研究課題：官能基特異的メタボノミクスを指向したLC-MS（／MS）用新規誘導体化試薬の開発とその応用

研究者：生活健康科学研究科 博士後期課程 植草 義徳

研究課題：NMRを用いたカテキン類とリン脂質膜との相互作用解析

平成20年度財日本食肉消費総合センター

研究者：主任研究者 食品栄養科学部 教授 横越英彦

共同研究者 薬学部 教授 菅 敏幸

研究課題：ヒスチジン含有ジペプチドによる脳神経機能に関する研究

平成20年度山崎香辛料振興財団研究助成金

研究者：食品栄養科学部 教授 渡辺達夫

食品栄養科学部 助教 成川真隆

研究課題：「非天然型」カプサイシン類縁体のトウガラシ加工品からの検出と生成機構の解明

平成20年度財テクノエイド協会福祉用具研究開発助成事業

研究者：国際関係学部 教授 石川 准

研究課題：GPSによる視覚障害者高精度歩行支援システムの開発

平成20年度厚生労働省成育医療研究委託事業

研究者：経営情報学部 教授 小山秀夫

研究課題：病院小児科における経営と医療の質ならびに医療収支に影響する諸因子の検討

平成20年度静岡市産学交流センター地域課題にかかわる産学共同研究委託事業

研究者：経営情報学部 准教授 岩崎邦彦

研究課題：中心商店街の愛着度に関する研究

平成20年度財河川環境管理財団河川整備基金助成事業

研究者：環境科学研究所 准教授 谷 幸則

研究課題：汽水域における富栄養化・温暖化の指標としてのピコシアノバクテリアの調査

平成20年度環境省廃棄物処理等科学研究費補助金

研究者：研究代表者：鳥取大学大学院工学研究科 教授 細井由彦

研究分担者：環境科学研究所 助教 関川貴寛 他3名

研究課題：人口減少を踏まえた生活排水処理施設整備手法の評価システムの構築

平成20年度財伊藤記念財団助成

研究者：環境科学研究所 助教 榊原啓之

研究課題：環境化学物質が惹起するDNA損傷に及ぼす食肉由来成分の効果

平成21年度独日本学術振興会国際研究集会助成

研究者：薬学部 教授 菅 敏幸

国際研究集会名：第5回日韓天然物談話会

※はばたき106号の平成20年度科学研究費補助金採択状況の記事中「岩堀恵祐」とあるのは、「岩堀恵祐」の間違いでした。お詫びして訂正します。

受賞

■第7回新規素材探索研究会最優秀ポスター賞を受賞

薬学研究科薬品製造化学教室の脇本敏幸助教が第7回新規素材探索研究会（横浜、6月6日）において最優秀ポスター賞を受賞しました。「ビール由来のムスカリンM3受容体結合活性物質Hordatine AとAperidineの合成研究」と題し、ビールという身近な飲料から得られた新たな機能性物質について、その詳細な構造研究と構造活性相関について発表しました。それらの成果が評価され受賞に至りました。



■天野エンザイム第9回応用酵素シンポジウムで研究奨励賞を受賞

6月13日(金)に、生活健康科学研究科の伊藤創平助教は、天野エンザイム第9回応用酵素シンポジウムで研究奨励賞を受賞しました。

同賞は、産業界に影響を与える可能性の高い酵素の応用研究に対して授与されるものであり、今回受賞の対象となった研究テーマは、「酸化修飾タンパク質の構造解析—分子レベルでの酸化ストレス」です。

伊藤助教は、同日メルパルクNAGOYA（名古屋市）で受賞講演を行ないました。（出典：(株)天野エンザイムHP

<http://www.amano-enzyme.co.jp/jp/company/kyuu.html>



■日本農芸化学会B.B.B.論文賞を受賞

生活健康科学研究科の丹羽康夫助教は、平成20年3月26日(水)から29日(土)までの4日間、名城大学天白キャンパスにおいて開催されました、日本農芸化学会2008年度大会においてB.B.B.論文賞を受賞しました。同賞は日本農芸化学会英文誌Bioscience, Biotechnology and Biochemistryに掲載された論文の中から、毎年優秀な論文に授与される賞です。同誌71巻pp. 2095-2100に掲載された論文「Improved Gateway Binary Vectors: High-Performance Vectors for Creation of Fusion Constructs in Transgenic Analysis of Plants」が受賞対象となりました。



■環境省水・土壌環境保全功労者表彰を受賞

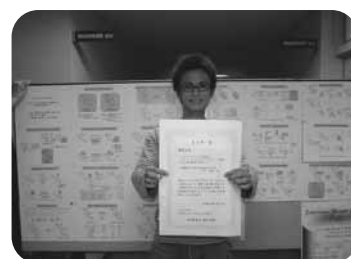
環境科学研究所 岩堀恵祐教授（研究所長）は、平成20年度の「環境省水・土壌環境保全功労者表彰」を受賞し、6月2日、静岡市役所静岡庁舎での伝達式で小嶋善吉市長から表彰状が手渡されました。この功労者表彰は、地域における河川等の水質浄化、生活排水対策等の普及啓発、水生生物の調査などを通じ、水・土壌環境の保全に関し顕著な功績のあった団体及び個人を顕彰するもので、本年度の受賞者数は20団体、8個人の計28です。

生活排水で汚れた都市河川（静岡市内の2級河川：巴川、丸子川、小坂川、庵原川）の浄化について、市民・事業者・行政が一体となって取り組み、よりよい水環境の実現を図るために組織された静岡市水環境パートナーシップ検討委員会（平成14～18年）の委員長として水環境保全目標の策定に尽力するとともに、静岡県の巴川水系流域委員会や佐鳴湖浄化対策専門委員会の委員など、地域における河川等の浄化対策に多大な貢献をしたことが評価されました。



■シンポジウム、モレキュラー・キラリティー2008最優秀ポスター賞を受賞

薬学研究科薬品製造化学教室の博士後期課程3年小泉靖明君がシンポジウム、モレキュラー・キラリティー2008（岡山、5月22～23日）において最優秀ポスター賞を受賞しました。小泉君の研究「(－)－セロトベニンの全合成」では不斉ロジウム触媒による反応を鍵反応として紅花由来の生物活性物質を立体選択的に全合成し、さらに紅花由来の化合物が不斉であることの要因を構造的な観点から明らかにしました。これらの成果が特に優秀なものであると評価されました。



■日本薬剤学会最優秀発表者賞および国際リポソーム会議最優秀発表賞のダブル受賞

薬学研究科博士前期課程2年の井田智子さん（医薬生命化学教室、奥教授）が、このたび全国規模の国内学会および国際学会の2つの大きな学会で最優秀発表賞をダブル受賞しました。2008年5月20～22日に札幌で開催された日本薬剤学会第23年会において井田さんは「腫瘍新生血管標的化リポソームを用いた血管新生阻害剤の効率的送達によるがん治療」というタイトルで発表を行い、最優秀発表者賞に輝きました。また7月19～22日に横浜で開催された第11回Liposome Research Days (LRD) Conferenceでは、「Cancer Antiangiogenic Therapy using Tumor Vasculature-targeted Liposomes Encapsulating SU5416」というタイトルでポスター発表と3分間の口頭発表を行い、最優秀発表賞に選ばれました。研究内容は、リポソームに血管新生阻害剤を内封し、腫瘍新生血管を標的として送達することにより、がんの増殖を抑制したというものです。研究内容もさることながら、英語のプレゼンテーションも素晴らしかったです。この経験を生かして、今後ますます活躍することを期待します。



■第35回コントロールドリリース学会最優秀ポスター賞受賞

薬学研究科博士前期課程2年の村瀬悠希さん（医薬生命化学教室、奥教授）が、2008年7月12～16日に米国ニューヨークで開催された第35回Annual Meeting & Exposition of the Controlled Release Societyにおいて最優秀ポスター賞を受賞しました。この学会は世界中のDDS研究者が集まるこの分野では最大の学会です。800題以上のポスターの中から厳正な審査のもと9題が最終的に選ばれるという激戦であり、受賞発表に関してはさらに口頭発表の機会が与えられました。村瀬さんの発表は「Antineovascular Therapy by Using Dual-Targeting Liposome」というタイトルで、新しいストラテジーとしてDDSキャリアに複数の標的プローブを修飾すると、単独の場合よりも相乗的に標的効率が上がるというものです。実際には腫瘍の増殖時に必須の新生血管に対して、2種類の異なる標的化ペプチドで修飾したリポソームに抗がん剤を内封すると、単独修飾の場合よりも新生血管に対する結合性と、抗腫瘍活性の増強が観察されました。村瀬さんの英語によるプレゼンテーションも極めて好評でした。大学院生が国際学会に果敢にチャレンジし、国際的に認められるという経験は、大きな自信につながるものと期待しています。

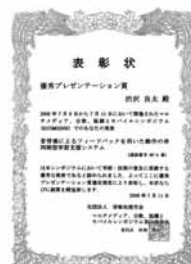


■情報処理学会マルチメディア、分散、協調とモバイル (DICOM2008) シンポジウムで優秀プレゼンテーション賞を受賞

7月9日(木)～11日(金)に開催された同シンポジウムで経営情報学研究所修士2年の渋谷良太君が優秀プレゼンテーション賞を受賞しました。

論文題名は、音情報によるフィードバックを用いた動作の非同期型学習支援システム（著者：渋谷良太、渡邊貴之、酒井美那、湯瀬裕昭、鈴木直義）です。

本論文は、在職看護師のフィジカル・アセスメント・スキル学習支援を目的とした遠隔学習システム開発－H20年度科学研究費補助金：研究種目〔基盤（B）〕課題番号〔20300270〕研究代表〔鈴木直義〕研究課題名〔動作実習教育のための遠隔指導システムの開発－フィジカル・アセスメントスキル訓練への応用－〕の研究成果です。



平成20年度星杯テニス大会開催される

実行委員：内川徹志 佐々木亮介 若林美由紀 清俊介

恒例となっている食品栄養科学部テニス大会の星杯は7月13日(日)に開催されました。梅雨の時期でしたが、当日は快晴で、焼けるような暑さの中、皆大いにテニスを楽しむことができました。初心者から経験者まで優勝の機会があるように、実力別に試合が組まれました。その結果、参加者51人中、経験者クラスでは鈴木裕一先生が、初心者クラスでは後藤新悟さんが優勝し、伝統のトロフィーを勝ち取りました。また、試合終了後に懇親会が開かれ、普段話す機会が少ない教員、学部生、大学院生、卒業生が大いに親睦を深めることができました。皆、日焼けして赤い顔をしながら楽しそうにやっていたので、実行委員一同は本大会を運営して良かったと思っています。20年近く続いている本大会について、まだまだ改善すべき点があるかもしれませんが、参加者全員が楽しめたのは幸いです。来年はさらに参加者が増え、より実りある大会にできたらと思います。



『全国少年少女草サッカー大会運営支援システム』が u-Japan大賞地域活性化部門賞を受賞

全国少年少女草サッカー大会は、毎年8月に全国から288チームが参加する全国最大規模のサッカー大会で、今年22回目を迎えました。本システムは、1月の参加申込から8月の大会期間の運営（総試合数は1,026、21会場37グラウンドにて1日288試合が行われる）全般を支援するシステムです。分散した会場での試合結果を、携帯電話のWebデータ入力やメールとカメラを活用して報告・確認し、試合結果の速報をインターネット経由で発信します。また、対戦相手の決定や会場移動や宿泊施設や弁当配布など事務局業務全部を本システムで一元的に管理します。

19回大会での試行から今年で4年目をむかえたこのシステムは、本学経営情報学部1・2年生の基礎演習受講者が、上級生やNPOしずおか情報ネットワーク機構メンバーのプロたちの支援を受けて、仕様決定のための発注者との打ち合わせからシステムの設計・開発・運用まですべてを担当しました。

本システムは、民産官学の連携による地域情報化・地域人材育成の成功例として評価され、u-Japanベストプラクティス2008優秀表彰事例として6月2日に総務大臣より地域活性化部門賞の表彰を受けました。

http://www.soumu.go.jp/menu_02/ict/u-japan/new_r_best.html



薬学教育・研究センターの開設

平成18年度から薬剤師の養成を目的とする薬学教育の年限が4年から6年に延長されました。6年制への教育年限延長は臨床関連教育の充実が主眼であり、それに対応するため、本学では静岡県立総合病院を臨床教育の拠点として位置づけ、関係強化を図ってきました。このたび静岡県立総合病院に循環器病センターが新築されるのを期に、循環器病センター内に薬学教育・研究センターを開設し、臨床薬剤学および臨床薬効解析学の臨床系2研究室を配置して9月1日から業務を開始しました。大学附属病院以外で薬学部が病院内に研究室を開設し、病院と連携して教育と研究を行うことは、全国初の試みであり、静岡県発の新プロジェクトとして県内外の薬学関係者の大きな注目を集めています。



石川嘉延静岡県知事が薬学教育・研究センターを視察

薬学教育・研究センターは、これからの薬剤師に必要とされる様々な知識や技術を実地で習得するための実務実習教育の中核施設であるほか、臨床に貢献できる薬学研究成果を挙げるため、薬物動態や遺伝子解析などの分野における静岡県立総合病院の医師・薬剤師との共同研究を通じて高度先進医療の一翼を担う拠点となることを目指しています。センター内には、講義室のほかに高速液体クロマトグラフ質量分析計、リアルタイムPCR、DNAシーケンサーなど、生体内微量成分の定量や遺伝子解析に必要な研究機器が整備されております。10月11日には当センター開所記念シンポジウムの開催を予定しています。

一日大学生！ 食の「はてな？」を教授から学んじょう！ ～「食育アドベンチャーランド」本学で開催

食品栄養科学部 准教授 市川陽子
非常勤助手 佐野文美

8月20日(木)、本学食品栄養科学部棟の実習室および体育館を会場に、(株)しょくスポーツ（こばたてるみ社長、東京）主催、本学食品栄養科学部共催、静岡ガス(株)等協賛による「食育アドベンチャーランド2008・体験その3『創造の湖』」が開催されました。このイベントは、子ども達のスポーツ活動への参加と食育を結びつけた指導法である「スポーツ食育プログラム」を開発、実践している(株)しょくスポーツが、県内で1年間に5回行うイベントの1回です。参加者は、6～12歳までの子ども達とその父母・祖母ら13組30人。また、ゲストとして、バレーボールVリーグの東レ・アローズから3選手（今田祐介、近藤茂、河雲栄樹）が来校しました。メディアも多数訪れ、翌朝の静岡新聞等で報じられました。

本学食品栄養科学部との共催は今年で3年目になりますが、今年度より栄養生命科学科の学生がインターンシップの形で「食育アドベンチャーランド」全回の運営に参加し、起業管理栄養士として活躍中のこばた社長から指導を受けています。この日は、2年生の竹内葵さん、渡辺祥子さん、フードマネジメント研究室修士1年生の遠藤亮君、4年生の橋詰さくら子さんがイベントをサポートしました。

当日は、「一日大学生！ 食の『はてな？』を教授から学んじょう！」と題し、1）木苗直秀教授、増田修一助教による県特産品のわさびを使った食品科学実験：切り方・おろし方による辛さの比較、飲み物の種類による辛さの変化、カビの防止効果など、2）市川陽子准教授による食事マナー講座：姿勢、箸の持ち方、配膳ゲームおよび調理実習、そして、3）東レ・アローズの3選手による食体験にまつわるトークショー、スポーツ食育が行われました。東レの選手達は、朝から子ども達と一緒に実験や調理実習にも加わってくださり、話の中で子どもの頃からの食事、運動、生活習慣の意義に触れていました。子ども達は、文字通り「五感をフルに使って」、食べることの大切さ、動くことの楽しさを体験していました。



選手と子ども達の調理実習風景



スタッフ全員集合

サイエンスフェスティバル in る・く・る 2008 に参加して

食品栄養科学部 栄養生命科学科 助教 栗山孝雄



実験風景

8月16日(土)に静岡科学館・る・く・るで開催された「サイエンスフェスティバル in る・く・る 2008 青少年のための科学の祭典 第12回静岡大会」に、食品栄養科学部より栗山、熊澤、増田、太田、伊藤、井上、石井、安井、藤田、佐野（以上教員）、森、富山（以上大学院生）、奥田（大学院修了生）の13名が実験講師として参加しました。

本イベントは、静岡県内の大学、高校、科学愛好家などの団体が参加して、青少年が科学の不思議さや楽しさを実感できるような実験や観察、工作等を行うもので、今回は54の団体が出展を行いました。

大会は8月2、3、16、17日の4日間行われ、来場者数は8月16日だけで6,160名、4日間では17,060名でした。多くの子供たちや親子連れが来場されました。

我々の出展テーマは、「ブドウジュースの色はなぜ変わるの？」であり、ブドウジュースに洗剤や酢などの家庭にある身近なもの（酸性またはアルカリ性物質）を加え、ブドウジュースの赤紫色がどう変化するかを観察するものです。この実験は子供たちだけでなく、同伴の保護者の方にも好評で、200名余りの子供たちが実験を楽しみました。我々のブースは、開会の10時過ぎから終了時刻の16時まで、来場者が途絶えることなく、大盛況でした。

今回の出展を通じて、子供たちに実験を楽しんでもらい、同時に科学に対して興味を持ってもらえたことと思います。来年度も参加を考えております。



当日の実験講師メンバー

活躍する修了生

～ グローバルに活躍する研究者をめざして ～

博士研究員はじめの一步

平成19年度 薬学研究科博士後期課程修了 谷川 尚

皆さん、初めまして。私は、今年の3月に薬学研究科博士後期課程を卒業し、4月からアメリカでポスドク（博士研究員）をしています。自分のような留学の日が浅いものが、書くのはおこがましいとは思いますが、これから大学院を修了して海外へポスドクとして行かれる方の参考になればと思います。

海外の生活などについては、まだいろいろ言えるような体験をしていないので、どのようにアプリケーション（応募）したらよいのかを、自分自身の経験を中心に書きたいと思います。

・留学先の探し方

こちらに来る日本人で多いのが、大学院の指導教員の知り合いのラボ（研究室）に留学するケースだと思います。海外でも同じ分野の研究をしたい場合には良いと思います。

私の場合は自分で探しましたが、一番いい方法は文献を読んで、興味を持ったラボにアプライ（応募）することだと思います。興味あることが、今やっている研究と直接繋がっている必要はないと思います。

・アプリケーション（応募書類）の書き方

アプリケーションの書き方はいろいろあると思います。研究留学をするための本がいろいろ出版されているので、それを参考にして書かれたら良いと思います。書くために大切なことはラボの何に興味があって、どういうことをしたいのかをしっかりと書くことだと思います。今の時代はe-mailで一度に沢山送れますが、ラボごとにしっかりと書くことが良いと思います。なによりも一番大切なものはレファレンスleter（推薦書）だと思います。一番良いのは世



界的に知られている先生にお願いすることだと思います。それができないときには、自分のことを知っている先生にお願いすることだと思います。こちらのP.I.（研究室の主任教員）の方に聞きましたが、かなり重視しているとおっしゃっていたので重要だと思います。

晴れてボス（研究室の主任教員）が興味をもってくれたら、次はインタビューです。

・インタビューの仕方

インタビューは直接ラボに行きに行く、電話で行う、もしくはe-mailで行う方法があります。電話で行うことが一番多いと思いますが、自分は電話インタビューをしていないので、内容について詳しくわかりません。しかし、沢山の方が経験されていると思うので、他の方から様々な情報が得られると思います。直接会ってインタビューした経験からいきますと、インタビューは1日かかりでした。朝、まず、ボスと1時間ぐらい話をします。1. なぜここで研究したいのか？ 2. ラボのどんな研究に興味を持っているのか？ 3. 日本でどんな研究をしているのか？ 4. ここに来ての雰囲気はどうか？ みたいな基本的なことを聞かれました。そして、ラボでの研究の説明を受けました。その後にはラボメンバー全員の前で自分がやってきた内容のプレゼン（発表）をします。だいたい、40-50分ぐらいだと思います。そして、質疑応答。プレゼンが終わった後、大学院生と一緒に昼食を食べに行き、話をしました。午後はポスドクやグループリーダーひとり一人と話をして終わりでした。採用するかどうかはラボの人全体



の意見を聞いて決めるみたいです。

最後に現在いる所のことについて書きたいと思います。アメリカ合衆国ミシガン州にあるUniversity of Michiganにいます。大学があるAnn Arborは大学の街であり、人口もさほど多くなく、田舎にいる感じです。そのためアメリカの中でも治安が良く、夜遅くまで実験して帰ってもさほど問題なく生活できます。その反面、娯楽施設がないために一人でいる時には大変暇をもてあましてしまいます。そのぶん好きなだけ実験はできると思います。現在所属しているラボには日本人が自分だけであり、他のメンバーとコミュニケーションを取る手段はいうまでもなく英語です。自分は英語があまり良く出来ないために、かなり苦労しています。留学を考えている方は単語やイディオムだけでもいいので、英語を勉強したほうがいいと思います。海外にいと日本とは違う環境や考え方を、身をもって体感することができます。しかしとりあえずポストドクだからという

英語－人生のリスクヘッジツール

数年前、「国際的な仕事をする」という目標を立て、その達成のために2つのことをしました。一つは県立大学の博士課程に社会人学生として進学すること、もう一つは外資系製薬会社に転職することでした。転職し、博士号を取得後、英国転勤となりました。一見順調に見える目標達成ですが、大きな落とし穴が一渡英後1年を経てなお英語が理解できないのです。

7月5日付けファイナンシャルタイムズ紙は、英国のパブリックスクール（私立学校）における中国人、ロシア人生徒の顕著な増加を報じました。英国の優れた教育システムと「英語による」教育が税制等と相俟って彼らの両親を惹きつけていると分析していました。

「きちんとした専門があれば、英語力は重要ではない」とよく耳にします。しかし、優れた研究は他の研究者とのコミュニケーションー論文、学会ーがあって成り立つものです。また、ビジネスの世界でも、国際的に活躍するビジネスパーソンは国籍を問わず皆流暢に英語を話します。

日本は、美しく安全で経済的にも成功した素晴らしい国ですが、日本という繭に守られて生きてゆける時代は今終わりを告げようとしています。英語を身につけることは、人生の選択肢を増やし、リスクヘッジに繋がる一だからこそ、中国人ロシア人富裕層は彼らの子弟を英国に送り込んでいるのです。

気持ちで来ると、最初は慣れない環境のためはかなり苦労も多く、ストレスを感じると思います。楽しいことを見つけながら、頑張ることが大切なことだと思います。これから海外に行くことを考えている人は、なぜ行くのか、本当に必要なかどうかを考えてください。たいした理由でなくても良いと思います。自分もたいした理由ではないので。

現在、たくさんの日本人が海外にいます。その方から直接その国のこと、大学や研究所のこと、いい面、悪い面を聞くことは、生の情報が得られるので良いと思います。悩んでいる方は直接聞いて頂けたらと思います。他にも海外で生活するためにはビザの取り方や、生活のセットアップの仕方などがありますが、その点についてもいろいろあるので、経験のある方に詳しく聞いた方がいいと思います。これが皆さんのこれからのご参考になればと思います。自分は海外を選択して良かったかといわれれば…良かったと思います。

平成18年度 薬学研究科博士後期課程修了 鈴木真由美

先日、ケンブリッジへのツアーに参加し若い学生さん達と知り合いました。このうち2人の母国語は英語ではありませんが、彼らは非常に流暢な英語を話しました。県立大学の学生の皆さん、是非英語を習得してください。ネイティブ同士の会話の中でも彼らの発言が完全に理解でき、自分の言いたいことがはっきりと伝わるレベルまで。同時に、できるだけ多くの外国の方と触れ合ってみてください。外国に出て、日本を美しく安全な国にしている目に見えない「繭」のありがたさと危険性を感じ取ってください。これらが達成できた時、あなたの可能性は格段に広がっていることと思います。私も諦めません。



右端が筆者

図書館だより

平成20年4月1日から8月31日までの図書の貸出冊数は14,313冊でした。貸出冊数は4年ぶりに増え、今後の利用が期待されます。今回の「図書館だより」では、平成20年4月から8月までの期間で貸出の多かった図書を紹介します。

貸出の多い上位20タイトルの図書

(4月～8月)

順位	タイトル名	著者名	回数
1	日本外交史講義 (岩波テキストボックス)	井上寿一著	26
2	楽園・味覚・理性：嗜好品の歴史	ヴォルフガング・ヴェルプシュ著/橋本義徳訳	25
3	入門価格理論 第2版	倉澤資成著	19
4	経済学殺人事件	M.ジェヴォンズ/著/青木栄一/訳	18
5	ジェンダー(図解雑学：絵と文章でわかりやすい!)	加藤秀一、石田仁、海老原暁子著	17
6	もっと知りたいシンガポール 第2版	綾部恒雄、石井米雄編	16
7	根拠がわかる症状別看護過程：ここからからだの56症状・事例展開と関連図	関口恵子編集	15
7	DVDで学ぶ身体侵襲を伴う看護技術	掛橋千賀子、真嶋由貴恵、奥山真由美著	15
9	症状からみた看護過程の展開：病態生理とケアのポイント	井上智子編集	14
9	認知症高齢者の看護	中島紀恵子責任編集/太田喜久子、奥野茂代、水谷信子編集	14
11	ひびけるほど仕事を楽しむ女たち：ウーマン・オブ・ザ・イヤー	日経WOMAN編	13
11	わかりやすい看護過程 (エキスパートナースMOOK.看護学生版シリーズ：2)	黒田裕子著	13
11	国際関係学への招待	六鹿茂夫、小久保康之、前山亮吉編著	13
11	臨床助産師必携：生命と文化をふまえた支援 第2版	我部山キヨ子編集	13
11	DNAを得る：取扱いの基本と抽出・精製・分離 第2版	田村隆明編	13
11	商業簿記2級 平成19年度版 (新検定簿記講義)	加古宜士ほか編	13
17	スカルノとスハルト：偉大なるインドネシアをめざして (現代アジアの肖像：11)	白石隆著	12
17	フィーリング・パース：心と体で感じるお産	矢島床子話す人/三井ひろみ聞く人	12
17	液クロ虎の巻(誰にも聞けなかったHPLC Q&A：液相色谱)	日本分析化学会液体クロマトグラフィー研究懇談会編	12
17	異文化間コミュニケーション：人間の行動原理に基づいた	西田ひろ子著	12

* 回数は学内利用者の貸出回数です。

* 網かけの図書は指定図書です。

今年4月から8月までに貸出された図書の、上位20タイトルは左の表のとおりです。このうち8タイトルが指定図書で利用の多いことがわかります。

各学部・研究科で最も利用の多かった図書は次のとおりです。

各学部・研究科で最もよく借りられた図書

(4月～8月)

学部・研究科	タイトル名	回数
薬学部・薬学研究科	DNAを得る：取扱いの基本と抽出・精製・分離 第2版	12
食品栄養科学部・生活健康科学研究科	液クロ虎の巻 (誰にも聞けなかったHPLC Q&A：液相色谱)	8
国際関係学部・国際関係学研究科	日本外交史講義 (岩波テキストボックス)	26
経営情報学部・経営情報学研究科	商業簿記2級 平成19年度版 (新検定簿記講義)	13
看護学部・看護学研究科	根拠がわかる症状別看護過程：ここからからだの56症状・事例展開と関連図	15
	DVDで学ぶ身体侵襲を伴う看護技術	15

* 回数は各学部・研究科ごとの貸出回数です。

* 網かけの図書は指定図書です。

図書館には、指定図書以外にも先生方に推薦していただいた「教員が選んだ100冊の本」が、図書館2階「自由閲覧室」に配架してあります。

読書に親しむ季節になりました。この機会に是非先生方のお薦め本を読んでみてください。

《本学教員からの寄贈著書》

図書館では、先生方に寄贈していただいた著作を、図書館2階「自由閲覧室」に配架しています。先生方の最新の研究成果に触れてみてください。()は本の請求記号です。

平成20年4月から8月までに図書館に寄贈していただいた先生の著作は次のとおりです。

- ・平山 洋先生 (国際関係学部)
『福澤諭吉－文明の政治には六つの要訣あり－』平山洋著 ミネルヴァ書房 (289.1/F85)
- ・廣瀬 陽子先生 (国際関係学部)
『コーカサス国際関係の十字路口』廣瀬陽子著 集英社 (319.297/H72)
『強権と不安の超大国・ロシア－旧ソ連諸国から見た「光と影」－』廣瀬陽子著 光文社 (302.38/H72)
『旧ソ連地域と紛争－石油・民族・テロをめぐる地政学－』廣瀬陽子著 慶應義塾大学出版会 (319.297/H72)
- ・前坂 俊之先生 (国際関係学部)
『ユビキタス・コンテンツビジネスのすべて－図解でわかる－』前坂俊之 ほか著 PHP研究所 (007.3/Ma28)
『ニッポン偉人奇行録』前坂俊之著 ぶんか社 (281.04/Ma28)
『メディア学の現在 新訂版』山口功二 ほか編 前坂俊之 ほか共著 世界思想社 (361.45/Me14)
- ・前山 亮吉先生 (国際関係学部)
『静岡の政治 日本の政治』前山亮吉著 静岡新聞社 (318.254/Ma28)

シリーズ 私の1冊の本

図書館では、「私の1冊」と題して、先生方がこれまでに読んで感動し、心に残った本をシリーズで紹介しています。紹介された図書は県立大学附属図書館の書架に配架してありますので、是非この機会に読んでみてください。

環境科学研究所 教授 吉岡 寿

紹介図書名：『天平の薨』

著 者 名：井上 靖

出 版 社 名：新潮社

I S B N : 978-4-10-106311-9

図書館所蔵：閲覧室 2 階 913.6/157



この夏、静岡県立美術館で「国宝鑑真和上展」が開催された。鑑真は、中国の唐の時代の高名な僧であり、天平時代の日本に来朝し、唐招提寺を開き、仏教の戒律を広めた人として歴史で学ぶことになっている。しかし、私のような、理系で、どちらかと言えば無神論者に近い人間にとって、鑑真は特に興味を引く人物ではなく、頭の片隅のどこかに、その名前が残っているにすぎなかった。鑑真とその時代に興味を持たされたのは、井上靖の「天平の薨」を読んでからである。二十代の後半だったような気がする。この本の主人公は鑑真ではなく、鑑真の来日を働きかけた日本の留学僧やその仲間であるが、色々なタイプの留学僧が登場し、それぞれが異なった価値観、人生観を持って生きて行く。その生き方が淡々とはあるが、鮮やかに描きだされているのが印象的だった。

私が学生の頃は昭和30年代の後半であり、まだ戦後を引きずっており、大学は学生運動が盛んな時代であった。授業を放棄して街中にデモに出かけるということもしばしば行われ、理系の学生と謂えども政治や社会と無関係では居れなかった。そういう時代の風潮は、何の為に科学を学ぶのか、という命題を私達に突きつけてきた。私自身はあまり政治的な活動が出来る人間ではなく、常にそのような状況から一歩離れて生きてきたが、自分が自然科学を学んでいることに、何か理由付けをしなければならない、という一種脅迫観念に近いようなものを、ずっと感じていた。

天平の薨では、主人公である普照という僧は、純粋に学問好きであり、真理を究める為に、仏教を学び、唐に留学することにも、そこに学ぶ価値を持ったものがあるかどうか、という主観的な立場で判断するような男である。栄叡という僧は、仏教を国家体制を安定化する手段として利用することを考え、その為に鑑真を日本に招こうとする。戒融という僧は、唐という国が強力に豊かに栄えているが、その一方で多くの貧しい人民が流浪しているのを見て、留学僧として学ぶ自分の立場に疑問を持つ。そこには学問と色々な形で関わりあう、典型的な人間像が描かれている。その他にも何人かの留学僧が登場するが、彼らは全てが、強い意志を持って人生を生き続けているわけではないし、純粋な学問の徒でもない。しかし、なぜか夫々の生き方に共鳴してしまう。この中で目的を果たして無事に日本に帰国できるのは、主人公のみであり、ある者は唐で客死し、ある者は帰国の遣唐船が難破して死んでしまう。この小説はまるで挫折していく人間を描くことが主題のようにも思えるが、暗さを感じないのは、各人がそれなりに一生懸命に生きる姿が描かれているからだろう。

私は『天平の薨』を読んだときに、幾分ほっとした気分になったことを記憶している。口幅ったい言い方をすれば、そこに自分の生き方と感情に共通するものがあったからかも知れない。「国宝鑑真和上展」を見た後、天平の薨を何十年振りかで読み直して見た。読後感は昔と変わらなかった。現代の学生気質は、私たちの時代とは余りにも違い過ぎる。この本が時代にマッチしているとは思わないが、出来れば今の学生にも読んでもらいたいと思う。

看護学部 教授 松岡 恵

紹介図書名：『ドクター・タチアナの男と女の生物学講座

ーセックスが生物を進化させたー』

著 者 名：オリヴィア・ジャドソン著 渡辺政隆訳

出 版 社 名：光文社 I S B N : 4-334-96165-7

図書館所蔵：閲覧室 2 階 481.35/J88



本書の英文タイトルは、『Dr. Tatiana's Sex advice to all creation』（全ての生物に対するタチアナ先生のセックスアドバイス）です。内容は、擬人化された動物たちの「身の下相談」にタチアナと名乗る怪しげな「先生」が回答するものです。とはいえ、決して興味本位の書籍ではありません。著者は、米国のスタンフォード大学を卒業し、ロンドン大学インペリアルカレッジ研究員を経て、サイエンスライターとなった科学者です。そして、巻末には80ページにわたる参考文献リストが掲載されている、きわめてまっとうな科学読み物です。

本書では、各章の始めに仮名の相談者、例えば「ガボンの悩める少女（実はゴールデンボット）」「クローバー畑の悩める女王（実はミツバチ）」「マレーシアの自信喪失ボーイ（実はハエ）」が書いた軽いノリの相談を提示し、次にタチアナ先生の回答が続きます。タチアナ先生の回答は、ある時は諭すように、ある時は同情的に、相談者に語りかける形式です。まさに新聞や雑誌の身の上相談です。ですから、私たちも、本書を読むと、相談者（実は人ではない）の不思議な性の悩みに対し「世の中にはそういう悩みを持つ人もいるのね」と感じ、タチアナ先生の回答を「なるほど、なるほど」と納得（？）させられるのです。

ところで、怪しいタチアナ先生の回答は、実は、生物にとっての生殖の意味、すなわち種の保存と種の繁栄という原則にのっとり、相談者の悩みの種である異性の行動を解説したものです。タチアナ先生は、雄は自分の子孫を数多く残すこと、雌はなるべく優秀な遺伝子を持つ雄と交尾することが動物の生殖行動の原則であることを繰り返し語ります。このような、生物としての本能的欲求は、人間も同じはずですが、このことを私たちは忘れていました。ところが、本書を読み進めていくと、人間も動物の一つであり、動物たちの「交尾」は実は「セックス」であり、私たちの「セックス」は実は「交尾」なんだと改めて気付きます。それにより、今まで忘れていた私たちの生殖行為にともなう生物としての根本的意義：「種の保存」、「種の繁栄」に気付かされるのです。そしてヒトは、他の種と比較して、生物として生殖行動にどのような特徴があるのか、冷静に見つめ直すことができるのです。

この本は、なによりも単純におもしろいです。そして、知的満足も満たしてくれます。各章が短く、拾い読みがしやすいというメリットもあります。相談者のプロフィールとなるイラストも、動物好きのかたには楽しめます。ご興味のある方は、是非ご一読ください。

夏休みの行事

体験してみよう！「薬のしくみ・体のしくみ」 “夏休みファーマカレッジ2008”開催

県内高校生を対象とした「夏休みファーマカレッジ」が「薬のしくみ・体のしくみ」をテーマに8月7日、8日の2日間にわたって開催されました。

今年で10年目を迎えるこの催しは、高校生に薬学への興味を深めてもらい、将来、この分野で活躍してもらうことを目指して、大学の最先端の研究に用いられている設備や、普段、高校生が手に触れることのない機器を使用して、最新の知識と技術にふれながら、薬学の世界を体験する機会を提供するもので、今年は42名の高校生が参加しました。

高校生たちは、白衣に身を包み、「病気の成り立ちを顕微鏡で見よう」「薬が効く様子を見てみよう」などの6つの体験テーマごと数名ずつに分かれ、教員や大学院生の指導の下、実際に機器や器具を操作しながら先端技術による様々な領域の実験に取り組みました。

実験結果は、最終的にレポートとしてまとめられ、報告会で発表、討論が行われるなど、大学での研究活動を実地で体験することを通じて、高校生に薬学に対する興味や理解を深めてもらいました。



環境問題に関するいろいろな実験に親子で挑戦！ 夏休み親子環境教室

環境科学研究所地域環境啓発センターでは、県民の環境問題に対する意識の向上や子供への環境教育を目的として、静岡新聞社・静岡放送が実施している「静岡かがく特捜隊」とタイアップして7月26日(土)に「夏休み親子環境教室」を開催しました。

3年生から6年生までの小学生とその保護者、計104名（うち小学生60名）が参加し、「植物の二酸化炭素吸収をはかってみよう」「バイオエタノールについて学ぼう」「牛乳パックをリサイクル」「ペットボトル水の測定に挑戦」の4つのテーマに沿って実験を体験しながら、親子で一緒に環境問題について考える一日を過ごしました。



実験の様子



集合写真

「実験を通じて、環境科学研究の面白さを体験する」 環境科学研究所・サマースクール 2008



環境科学研究所地域環境啓発センターでは、「実験を通じて、環境科学研究の面白さを体験する」をテーマに、8月7日(木)と8日(金)の2日間に亘って、大学での環境研究に興味のある高校生以上の県民の方々を対象に、「環境科学研究所・サマースクール2008」を開催しました。

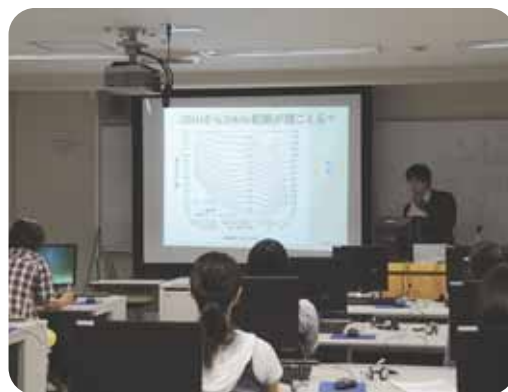
今年度は、10の課題を掲げ、高校生を中心に32名の参加があり、最先端の設備を使用した実験を体験していただきました。

オープンレクチャ

高校生が経営情報学部の授業を体験！

「オープンレクチャ2008開催」

「経営情報学部にはどんな授業があるのだろうか」をキャッチフレーズに、高校生を対象とした「経営情報学部オープンレクチャ」(第7回)が、去る6月22日(日)に開催されました。経営情報学部では、経営学と情報学の両方の知識や技術を持つ人材の育成に取り組んでいます。しかし、高校生にとっては本学部の授業は馴染みが薄く、分かりにくいものもあります。そこで、実際に高校生に授業を体験していただくのが一番と考え、この企画が生まれました。今年は、高校生以外にも、保護者、高校教員、留学生から多数の参加がありました。参加者総数は105名で、その内訳は、高校生74名、保護者14名、留学生16名(中国13名、ミャンマー2名、他1名)でした。



今年は、次の6つの授業：「個人と集団、どちらが創造的な意思決定ができるのか」「ヒット商品は、どのように生み出されるのかー高校生のためのマーケティング入門ー」「財政学ー税のしくみー」「なんでもアリただしズルはダメー社会のルールと組織の掟ー」「ネットワークの科学ー噂の広がり方の数学ー」「情報科学概論ー音声処理の基礎ー」が行われ、各授業とも受講生は熱心に耳を傾けており、好評のうちに終了しました。

「&YOU」発行

キャリア形成に関する情報誌「&YOU」

～学生が企画から編集まですべてを担当～

本学のキャリア支援センターでは、キャリア形成や就職に関する情報誌『&YOU』を発行していますが、同誌の編集は、企画立案から取材、記事の執筆、誌面の構成にいたるまで、すべてを学生が行っています。

本学の在学生や卒業生が、よりよい社会を目指して自ら積極的に社会に参画する、本当の意味での「社会人」として育つというのは、本学のキャリア支援の大きな目標の一つです。

『&YOU』という誌名には、「読む人すべてが主役」という意味が込められており、『&YOU』を読んだ県大生が、上に述べたような意味を含めて、社会で活躍する人になって欲しいという願いを持って作られています。

学生が、大学の機関誌である『&YOU』の編集を行うことで、一つの社会である大学の活動に学生が主体的に参画する場が生まれています。現在、学生スタッフは総勢12名。全員が編集の素人ですが、自分たちで勉強し、仲間と助け合い、楽しみながら編集作業を続けています。『&YOU』の編集を通じて、仲間と一緒に仕事することの喜び、社会人への取材を通しての気づきなど、さまざまなことを吸収しています。

【学生スタッフの言葉】

- ・(取材を通して)社会人の皆さんからは、仕事への思い入れを感じました。大変なこともあるかもしれないけど、仲間がいれば一緒に向かっていけるし、それを成長のチャンスと捉えることもできると思いました。
- ・作業が大変でも、素敵な人やおもしろい人に会えると疲れなんて忘れてしまいます。

自分の世界が広がっていくのがわかり、本当に楽しいです。

★情報誌『&YOU』のHPはこちらです

→ <http://career.u-shizuoka-ken.ac.jp>



*** 第Ⅰ回全学FD講演会が開催される ***



全学FD委員会委員長 副学長・木苗直秀

大学の教育力を推進するため、文部科学省は昨年4月より大学院教育、本年4月より学部教育でのFD（Faculty Development）を義務化しました。FDとは、教授能力を開発するもので、事業としては新任教員を含む教員の研修会の実施、公開授業と授業評価の実施、講演会の開催、教育方法の改善のためのセンターの設置等が挙げられます。本学では、全学FD委員会とともに各部局（学部・大学院）にFD委員会が設置されています。

全学FD委員会による本年度第1回の講演会は、7月18日（金）に、本学一般教育棟2103教室において、独立行政法人日本学術振興会研究助成第一課長の岡本和久先生を講師としてお迎えし、「科学研究費補助金制度の概要」をテーマとして開催されました。本講演を通して教育推進の原動力となる教員の研究力を確保するための積極的な方策が紹介されました。およそ170名の教員・事務職員が参加し、熱心な質疑応答が行われました。

教員の著書紹介

「百寿者百話 生き方上手の生活法」

海電社 全235頁 2008年8月15日刊行 定価1429円
国際関係学部 教授 前坂俊之

日本は世界一の長寿大国で、平均寿命は女性が86歳、男性が79歳です。百寿者も3万6千人を突破していますが、一方で、寝たきり長寿者が増えていることも事実です。どうすれば九十歳、百歳まで生涯現役で元気に天寿を迎えることができるのでしょうか。その答えを求めて、日本を代表する不老長寿の天才たちを千人調査して、そのうち90歳以上の代表選手70人の創造力、健康法の秘訣に迫ってみました。

平櫛田中（107）、大西良慶（107）、小倉遊亀（105）、片岡球子（103）三浦敬三（102）、瀬島龍三（95）、山本玄峰（95）、徳富蘇峰（94）、松下幸之助（94）ら錚々たる、日本を代表する芸術家、政治家、経済人、学者らの創造的な健康長寿者たちで、その老後の知恵、生き方を取材しました。

食事は粗食で腹7分がいいこと、食わなければ創造的な仕事、長生きができること。高齢になるほど体力増強、筋トレが大切という健康訓や養生訓、それ以上に気力・精神力・持続力こそ天寿の秘訣というセンチナリアン（百寿者）たちの珠玉の名言、名訓、語録を百語並べました。

「60、70洩たれ小僧」（平櫛田中）にとって、今後の超高齢社会を元気に生きぬくための大いなる指針となること間違いなしの本です。また、こうした長寿者を介護する人、学生にも参考になる1冊です。



『静岡の政治 日本の政治』

静岡新聞社 全130頁 2008年7月4日刊行 定価840円
国際関係学部 准教授 前山亮吉

静岡新聞をお読みの方は、「時評」コーナーがあるのをご存知だと思います。私は2002年9月から2ヶ月に一度担当し、早いもので6年目に入りました。偶然ですが小泉・安倍・福田の3政権を迎え、2度の総選挙・2度の参院選があった政治変動と混迷の時期を折々に分析した事になります。新聞連載は所詮読み捨てられますが、本にすると新たな価値が生じます。この本の場合も6年間の政治変動を、「全国の縮図」といわれることの多い静岡県という視点から一貫して分析したと思います。新聞連載をただ本にただけでは芸がありませんので、その後の展開・データ・書けなかった問題等を盛り込んだくメモを新に書き添えた点が特色です。もちろん政治学の基礎・国際比較・政治史の教訓等研究成果も隠し味として要所に効かせています。とかく外国の事をやっているのが国際関係という風に見られがちですが、自国である日本のことを理解できずに「国際」の分析はできないと思います。足元である日本そして大学がある静岡県を、政治という角度から、きちんと考えてみようという思いもこの本には込められています。



学内広報誌「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・学生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

教育研究推進部・広報室（はばたき棟3階）宛にお願いします。

E-mail: koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会（事務局 TEL 054-264-5130）

静岡県立大学ホームページアドレス: <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>